熊本県文化財調査報告　第２２１集

城の鼻横穴群

―古城単県急傾斜地崩壊対策工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告―

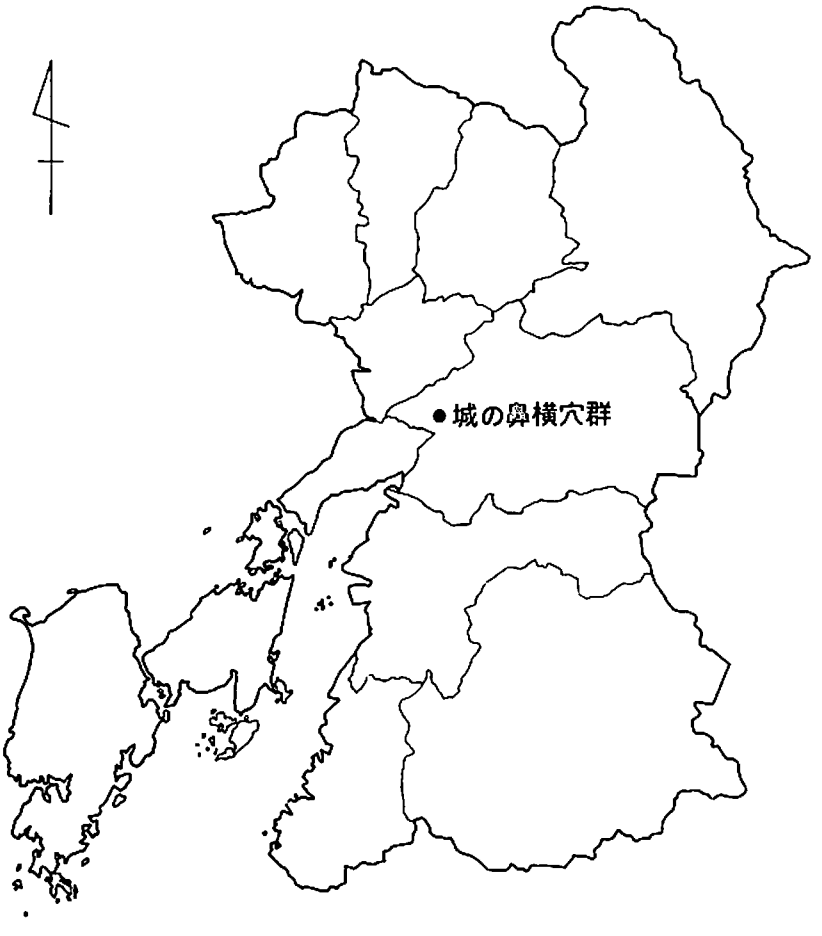
２００４年３月

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第２２１集

城の鼻横穴群

― 下益城郡城南町大字隈庄字古城に所存する古墳群及び中世城跡の調査 ―



２００４年３月

熊本県教育委員会

序　文

熊本県は、阿蘇山、天草をはじめ豊かな自然が数多く残されており、雄大な景観が見られるほか、歴史的にも数多くの文化遺産が残されています。城の鼻横穴群が所在する宇城地方にも、古墳をはじめ数多くの遺跡が残されています。これらを守り、後世に残していくためには、県民の方々の文化財に対する深い御理解と御協力をいただかなければなりません。

本書は、熊本県土木部による古城単県急傾斜地崩壊対策工事に先行して実施した古墳時代の城の鼻横穴群の発掘調査報告書です。当遺跡が所在する城の鼻丘陵にはこのほか箱式石棺を埋葬主体とする城の鼻古墳群や戦国期の隈庄城跡が所在し、調査の結果、箱式石棺や井戸跡、堀切などの関連遺構が確認されました。今回の調査はその実態も把握できたという点では貴重な調査となりました。

この報告書が、宇城地方の歴史を語るうえで重要な資料となり、皆様方の文化財に対する御理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査の円滑な実施に御理解と御協力をいただきました地元の方々並びに関係諸機関に対して厚く御礼申し上げます。

平成16年3月31日

熊本県教育長　田　中　力　男

例　言

1　本書は熊本県下益城郡城南町大字隈庄字古城に所在する城の鼻横穴群の発掘調査報告書である。

2　調査は古城単県急傾斜地崩壊対策工事に伴う事前調査として、熊本県土木部砂防課の依頼を受け、熊本県教育庁文化課が実施した。調査期間は平成10年1月27日から平成10年2月9日（第1次調査）と平成10年12月10日～平成11年2月26日（第2次調査）の2次にわたって実施した。

3　現地調査に関する実測及び写真撮影は主に調査員で行い、「埋蔵文化財サポートシステム熊本支店」の補助があった。

4　報告書の作成については、平成15年度に熊本県立装飾古墳館分館「歴史公園鞠智城・温故創生館」において実施した。

5　遺物の実測は矢野裕介（歴史公園鞠智城・温故創生館）が行い、遺構・遺物の製図（トレース）は川上寧子、徳永澄子、菊川直美、青木絵美が行った。

6　遺物の写真撮影は矢野が担当し、池田朋生（熊本県立装飾古墳館）中山圭（歴史公園鞠智城・温故創生館）の補助があった。

7　本書の執筆は矢野が行った。

8　本書の編集は歴史公園鞠智城・温故創生館で行い、矢野が担当した。

凡　例

1　遺跡名については、熊本県発行遺跡地図記載の名称を適用した。

2　遺構番号は種別に関係なく、連番を付した。

3　現地での図面の縮尺は、遺構配置図を1/100、13号堀切の土層断面図を1/50、9号横穴墓出土遺物の検出状況、15号箱式石棺の平・断面図、16号土壙の平・断面図を1/10、その他は1/20とした。

4　遺構実測図及び遺構配置図の方位はすべて国土座標における座標北（G. N）を指す。

5　掲載遺物の縮尺は、銅銭拓影を等倍、玉類を1/2、その他を1/3とした。

6　遺物写真の縮尺は、須恵器、青磁、染付、軒丸瓦を約1/2、銅銭、鉄剣、玉類を約3/4、土師器、瓦質土器、軒平瓦、貝、9号横穴墓出土鉄製品を約1/3とした。

本文目次

第Ⅰ章　調査の概要 …… 1
第1節　調査に至る経緯及びその組織
1　調査に至る経緯
2　調査の組織
第2節　調査方法とその経過
1　調査の方法
2　調査の経過

第Ⅱ章　遺跡の概要
第1節　遺跡の位置と環境 …… 5
第2節　遺跡の概要
第3節　周辺の関連遺跡
1　横穴墓
2　中世城跡

第Ⅲ章　調査の成果
第1節　古墳時代 …… 11
1　横穴墓
2　その他の遺構
第2節　中世
1　遺構
2　出土遺物

第Ⅳ章　まとめ
第1節　城の鼻横穴墓群 …… 33
1　形態分類及びその変遷
2　造墓期間
3　横穴墓出土の巻貝について
第2節　隈庄城跡
1　登城道
2　廃城時期

挿図目次

第１図　城の鼻丘陵周辺図 …… 2
第２図　調査区位置図 …… 3
第３図　周辺の関連遺跡 …… 6
第４図　熊本県内における『慶安の差出』記載の中世城跡 …… 10
第５図　Ⅰ区遺構配置図 …… 11
第６図　1号横穴墓 …… 12
第７図　2号横穴墓 …… 13
第８図　3号横穴墓 …… 14
第９図　Ⅱ区遺構配置図 …… 15
第10図　4号横穴墓 …… 16
第11図　5号横穴墓 …… 17
第12図　6号横穴墓 …… 18
第13図　7号横穴墓 …… 19
第14図　8号横穴墓 …… 20
第15図　9号横穴墓 …… 21
第16図　9号横穴墓出土遺物配置図 …… 22
第17図　9号横穴墓出土鉄製品 …… 22
第18図　10、11号横穴墓 …… 23
第19図　出土土器 …… 24
第20図　出土玉類 …… 25
第21図　15号箱式石棺 …… 26
第22図　15号箱式石棺出土鉄剣 …… 26
第23図　16号土壙 …… 27
第24図　12号竪坑 …… 28
第25図　13号堀切 …… 29
第26図　中世遺物 …… 31
第27図　軒瓦拓影 …… 32
第28図　銅銭拓影 …… 32
第29図　郡村図記載の隈庄城 …… 35

表目次

第1表　周辺の古墳時代遺跡一覧 …… 7
第2表　周辺の中世遺跡一覧 …… 9
第3表　「慶安の差出」記載の益城郡内の中世城跡一覧 …… 10

図版目次

図版1　城の鼻丘陵全景（西から）
図版2　1号横穴墓
　　2号横穴墓
　　3号横穴墓
図版3　調査Ⅱ区全景（南から）
　　4号横穴墓
　　5号横穴墓
図版4　6号横穴墓
　　7号横穴墓
　　8号横穴墓
図版5　9号横穴墓（南から）
　　10号横穴墓
　　11号横穴墓
図版6　15・16号配置状況（東から）
　　15号箱式石棺（北から）
　　15号箱式石棺完掘状況（北から）
　　16号土壙（東から）
図版7　12号竪坑（南から）
　　12号竪坑内部
図版8　13号堀切断面（西から）
　　13号堀切近景（南から）
　　13号堀切全景（北東から）
図版9　須恵器
図版10　須恵器
　　青磁・染付
図版11　土師器・瓦質土器
図版12　軒丸瓦・軒平瓦
図版13　鉄製品
図版14　銅銭・鉄剣・玉類
　　貝

第Ⅰ章　調査の概要

第1節　調査に至る経緯及びその組織

1　調査に至る経緯

下益城郡城南町大字隈庄字古城に所在する城の鼻丘陵において、県土木部による災害復旧及び保全処置を目的とした「古城単県急傾斜地崩壊対策工事」により丘陵西崖面に防護壁を設置することとなった。

当該工事に係る丘陵崖面には古くから古墳時代の城の鼻横穴群が開口し、現在、城の鼻公園として整備されている丘陵上面には箱式石棺を埋葬主体とする城の鼻古墳群が所在した。このほか、戦国期の城郭「隈庄城」の本丸跡（隈庄城跡）でもあり、いずれも町史跡として指定されていた。

このように周知の埋蔵文化財包蔵地であったため、県土木部の依頼を受けた文化課は、町教育委員会とも十分に協議を重ねた上で発掘調査を実施することとなった。調査は、当該工事の工期の関係上、平成9年度（平成10年1月27日～2月9日）と平成10年度（平成10年12月10日～平成11年2月26日）の2次に分けて実施した。

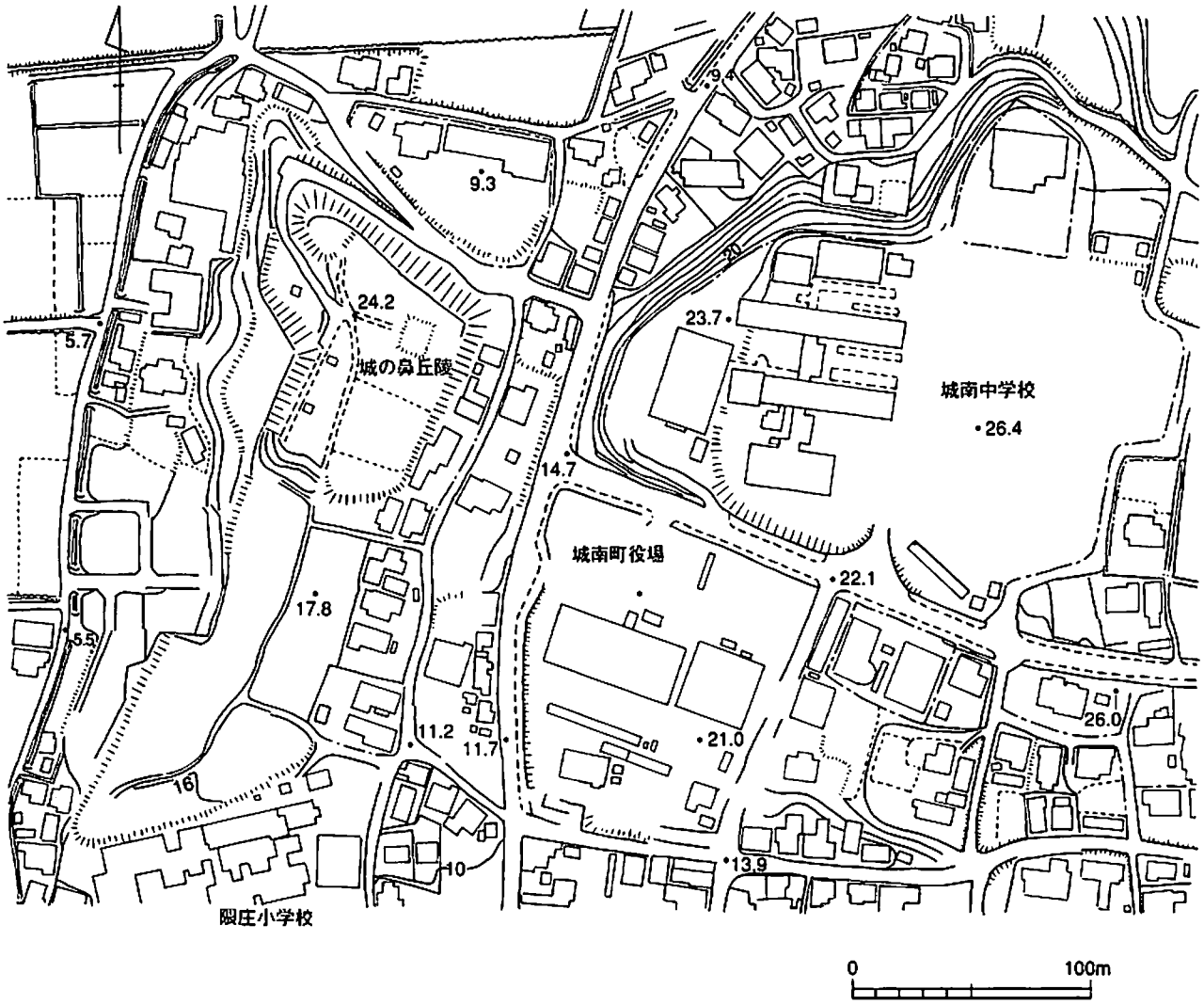
2　調査の組織

平成9年度

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	豊田貞二（文化課長）
調査総括	丸山秀人（教育審議員・課長補佐）
	島津義昭（主幹・文化財調査第2係長）
調査事務局	石原昭宏（課長補佐）
	江尻靖子（総務係長）
	岸本誠司（主事）
	川口久夫（主事）
調査担当	安達武敏（嘱託）
調査協力	清田純一（城南町教育委員会）

平成10年度

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	豊田貞二（文化課長）
調査総括	島津義昭（課長補佐）
調査事務局	伊津野　博（課長補佐）
	小斉久代（総務係長）
	岸本誠司（主事）
	川口久夫（主事）
調査担当	矢野裕介（学芸員）
	安達武敏（嘱託）
調査協力	清田純一（城南町教育委員会）



第1図　城の鼻丘陵周辺図

第2節　調査の方法とその経過

1　調査の方法

1）調査対象

前節で述べたとおり、発掘調査は平成9年度（第1次）、平成10年度（第2次）と2次に分けて実施した。調査対象は、防護壁の設置という工事の性格上、工事の及ぶ丘陵崖面に限定された。第1次調査では丘陵北西の屈曲部周辺崖面（以後、Ⅰ区という。）、第2次調査ではそれに連続する丘陵西崖面（以後、Ⅱ区という。）を調査対象とした。（第2図）

2）Ⅰ区の調査

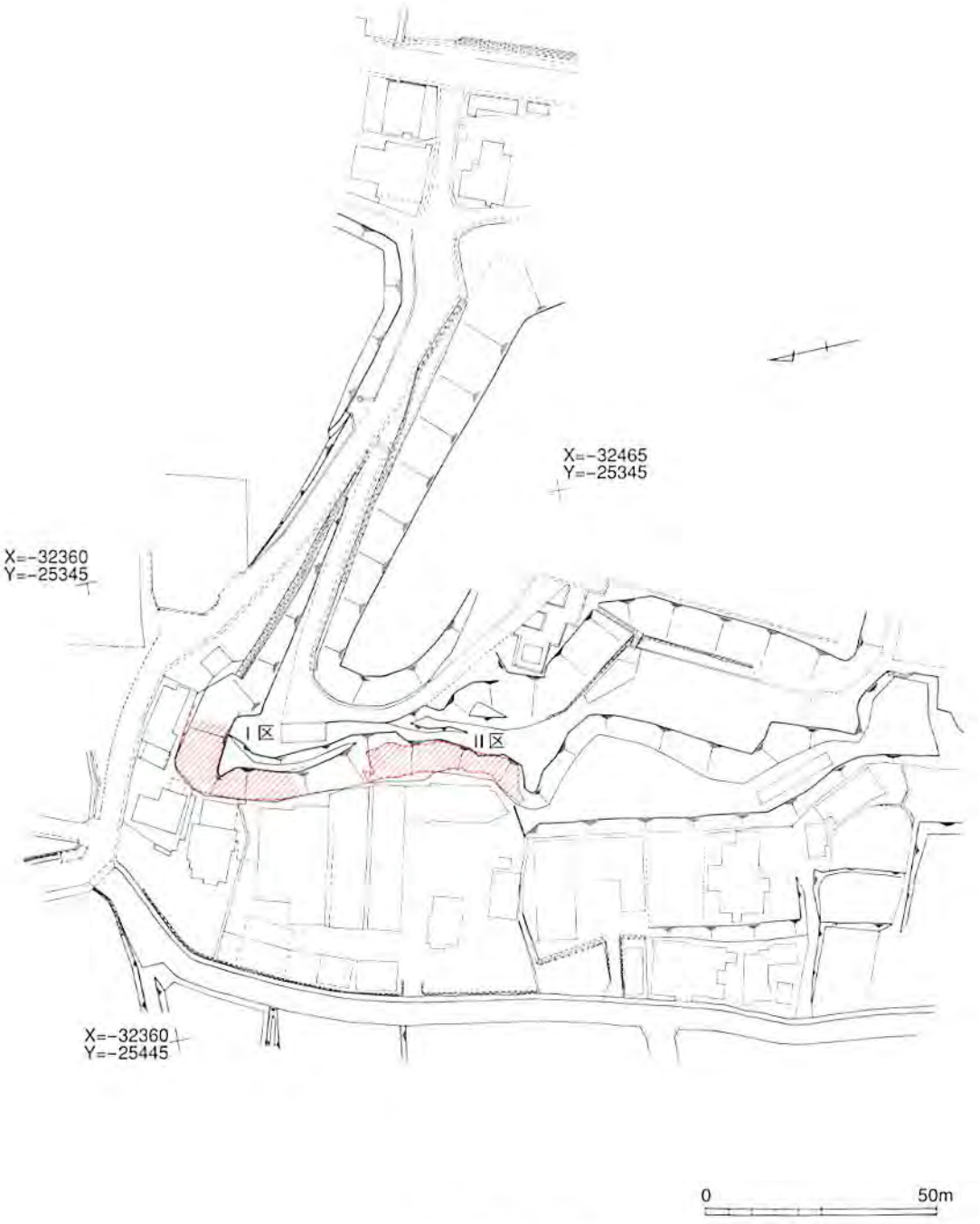
Ⅰ区においては、調査以前から開口していた3基の横穴墓（1号、2号、3号）の調査を実施した。3基とも後世の崖面造成により天井部から玄室前方にかけての欠損が著しく、特に2号横穴墓については奥屍床部のみの残存であった。

各遺構の掘削等は人力により、掘削に当たっては遺物の有無に注意を払った。掘削した土砂については、遺物及び骨片の抽出を目的とした水洗いによる選別作業を実施した。なお、唯一遺物の出土があった1号横穴墓については、遺物の出土地点を記録した。

3）Ⅱ区の調査

Ⅱ区においては、調査以前から開口していた4基（4号～7号）の横穴墓と新たに検出された横穴墓4基（8号～11号）、中世の竪坑（12号）・堀切（13号）・不明遺構（14号）各1基、古墳時代の箱式石棺（15号）・土壙（16号）各1基の調査を実施した。

当初、横穴墓の調査については前者の既開口の横穴の調査で終了する予定であったが、表土を剥いだ段階で当該崖面及び上部の緩斜面上において新たな遺構を確認したため、丁寧な遺構検出作業を実施した。各遺構の掘削等は人力により、Ⅰ区同様に横穴墓の埋土については選別作業を実施して遺物等の採取に慎重を期した。また、9号及び15号の副葬遺物については出土地点を記録した。なお、12号竪坑の掘削については、深さ5m弱まで掘り進めたが、遺構内が狭小な空間となり崩落の危険が生じたため掘削を中止した。



第2図　調査区位置図

2　調査の経過

1）第1次調査

第1次調査は平成10年1月27日から2月9日までの期間で実施した。1月27日に調査準備、28日から1号横穴墓より本格的な掘削を開始し、29日、奥屍床部から管玉1個を検出した。その後、2号、3号と順次掘削し、併せて各遺構の遺構実測、写真撮影を行った。2月5日に遺構配置のための平板測量を行い、6日の3号横穴墓の写真撮影で現場作業を終えた。9日に埋土の水洗いによる選別作業を実施し、調査を終了した。

2）第2次調査

第2次調査は平成10年12月10日から平成11年2月26日までの期間で実施した。本格的な調査の前に、調査箇所に繁茂した草木の除草、伐採作業を実施した。14日より既開口の4基の横穴墓（4号～7号）の掘削及び壁面の清掃作業、それと併行して5日から崖面上端の緩斜面の掘り下げ作業を開始した。17日より4基の横穴墓の掘削を一時中断し、崖面上端の緩斜面の掘削に作業を集中させた。24日より14号竪坑を当初横穴墓と認識し掘削を開始した。

平成11年に入った1月12日、崖面上端の精査で新たに横穴墓らしき遺構が4基検出され、各遺構の掘削を開始した。なお、そのうちの3基はその後の調査で不明遺構（14号）、箱式石棺（15号）、土壙（16号）と判明した。14日、13号堀切の掘削を開始した。2月に入り、新たに検出された8、9、10号横穴墓の本格的な掘削を開始し、5日には9号横穴墓の奥屍床から坏蓋1点と鉄鏃4点を検出した。それと併行して、8日より中断していた4号～7号の横穴墓の掘削を再開した。9日、10号横穴墓と13号堀切の間に11号横穴墓を検出した。10日より4号横穴墓から順次実測作業及び横穴墓埋土の土砂選別作業を開始した。15日に8号横穴墓の掘削が終了し、横穴墓の掘削を終えた。その後、調査は丘陵上端に移り、16日より14号テラス状遺構、15号箱式石棺、17日より16号土壙の本格的な調査を開始する。18日、15号の床面直上から鉄製刀子を検出した。

22日、調査区全景の写真撮影。25日、13号堀切の完掘写真撮影をし、現場作業を終え、その翌日、遺物発掘用具等を撤収して調査を終了する予定であった。ところが、その後、工事施工中に遺物が出土したとの報を受けて現場に駆けつけたところ、9号横穴墓の奥屍床部から須恵器の短頸壺が検出された。精査したところ、床面まで掘り下げていないことが判明。掘削を再開したところ新たに鉄鏃5点が検出されたため、出土地点を記録して遺物の取り上げを実施した。

第II章　遺跡の概要

第1節　遺跡の位置と環境

熊本平野の南端には、緑川を本流とする中小河川の開析によって形成された中位段丘（舞原台地、塚原台地）が所在する。城の鼻横穴群はそのうちの舞原台地の西端、通称「城の鼻丘陵」の北西から西にかけての崖面に所在する。丘陵の北は熊本平野が一望でき、南には緑川の支流浜戸川が西流し、肥沃な土壌を形成する。さらに南には雁回山の頂を見る。また、当該地域は阿蘇火砕流堆積物（Aso4）を堆積原面としており、雁回山北裾、舞原台地、塚原台地の周縁部には岩盤が露出した箇所が多く見られ、横穴墓を築造するのに適した環境といえる。そのため古墳時代には20群477基以上の横穴墓が造営され、県内有数の横穴墓分布地域として知られる。

この浜戸川流域は各時代を通じて遺跡の多い地域でもある。旧石器時代から人類の痕跡が認められ、縄文時代には、雁回山北裾の浜戸川河岸に阿高、黒橋、御領〔いずれも国指定〕といった九州を代表する大規模な貝塚が形成される。弥生時代中期以降には、舞原台地西端の宮地地区に遺跡が集中する傾向にある。なかでも、巴形銅器、銅鏡などの青銅製品や「貨泉」、「大泉五十」といった銅銭を出土した新御堂遺跡〔町指定〕は大規模な環濠集落として知られ、その規模や出土遺物が他の周辺遺跡を圧倒していることから緑川中流域の拠点的集落と考えられている。

古墳時代になると、浜戸川をやや遡った舞原台地及び塚原台地上に古墳が造営される。特に、左岸の塚原台地上に所在する塚原古墳群〔国指定、4c末～6c末〕は、全長62mを測る琵琶塚古墳、花見塚古墳といった前方後円墳を中心に、102基に及ぶ古墳及び周溝墓が検出され、熊本県を代表する古墳群が形成される。隣接する上の原遺跡は5世紀前半代の大規模集落跡で、塚原古墳群形成の前半期（方形周溝墓、円墳など）の造墓集団の集落と考えられている。浜戸川を挟んだ対岸の舞原台地にも、塚原古墳群と同規模の前方後円墳が2基（甚九郎山古墳、狐塚古墳）所在する。なかでも甚九郎山古墳〔町指定〕は彩色壁画を持つ装飾古墳として知られる。

古代の遺跡は、舞原台地の西側に集中する。西端の宮地地区には、『延喜式』にみる駅家「球磨駅」の存在が推定され、また、右近、左近といった地名が残る舞ノ原地区にある沈目遺跡周辺は、肥後国府推定地〔町指定〕とされ、越州窯系の青磁、白磁など官衙的色彩の強い遺物が出土する。また、陳内地区には法起寺式の伽藍配置を持つ陳内廃寺跡（町指定、7c末～8c初）が所在する。

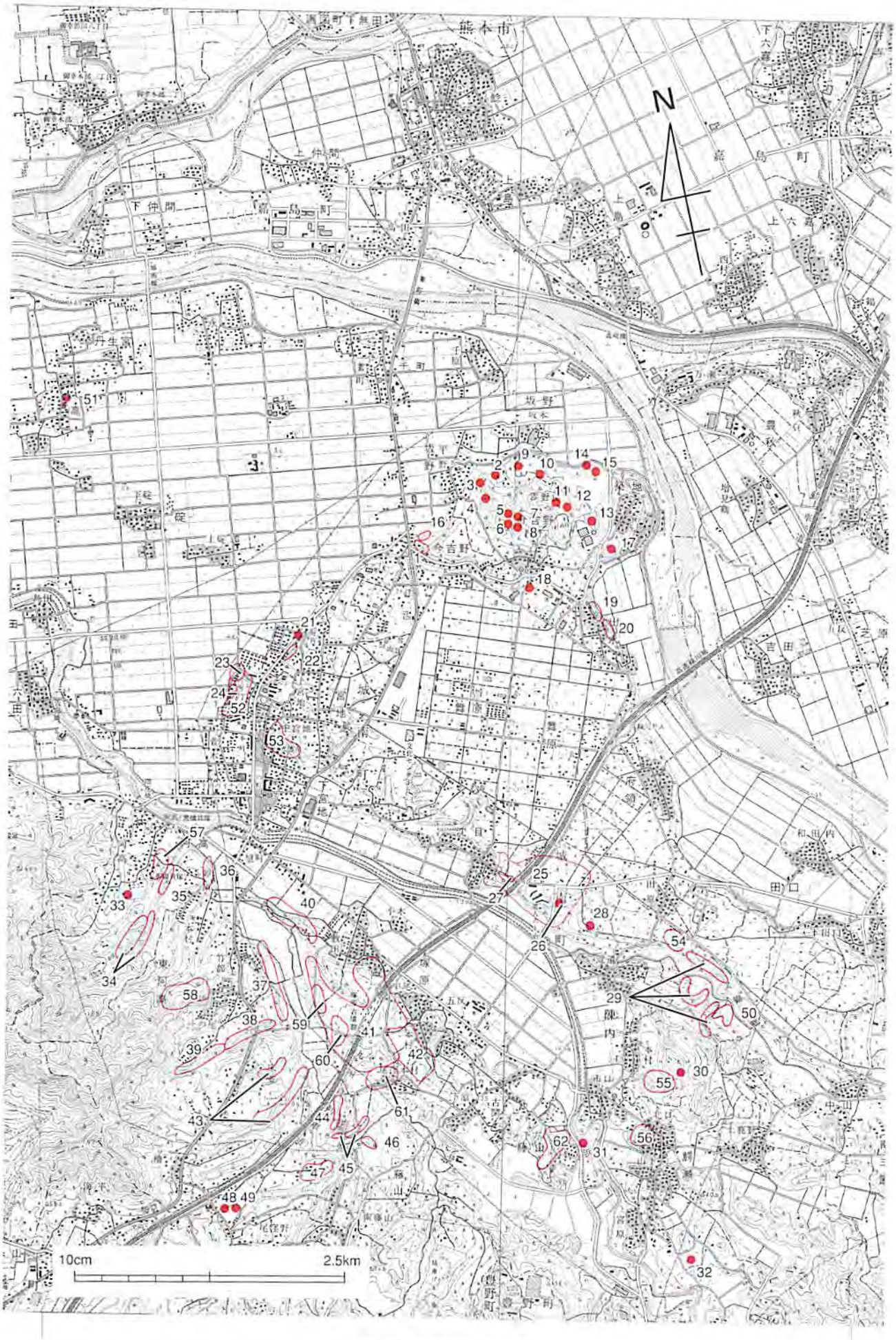
古代末から中世初頭にかけては歓喜光院領となり、隈牟田庄として栄えたとされ、初期庄寺とされる祇園寺跡〔町指定〕がある。その後、舞原台地の西南裾にその中心は移り、鎌倉時代後期、菊池武房の創建とされる肥後最古の禅寺、能仁寺跡〔町指定〕が所在し、その周囲に隈庄町が形成される。戦国時代には甲斐氏など有力豪族がこの地に城を構えるが、その規模から益城郡内の拠点的城郭として盛行した。それが隈庄城跡〔町指定〕である。

第2節　遺跡の概要

城の鼻丘陵には、当該横穴群のほか、箱式石棺を埋葬主体とする城の鼻古墳群、戦国期の隈庄城跡が所在することは前章で述べたとおりである。それら遺跡の概要について以下に記す。

城の鼻横穴群

丘陵の西崖面に22基の横穴墓が開口する。軟質の阿蘇熔結凝灰岩に穿たれている上に戦時の防空壕等で破損が著しく、遺存状況は極めて悪い。



第3図　周辺の関連遺跡

第1表　　周辺の古墳時代遺跡一覧

No.	市町村	遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備　考
1	341	4	今村横穴群	今　吉野　東原	古墳	古墳		須恵器片
2		9	東天神原甲古墳	板野　東天神原	古墳	古墳	町	円墳、土製管玉、東天神原古墳群
3		10	東天神原乙古墳	板野　東天神原	古墳	古墳	町	円墳、土製管玉、東天神原古墳群
4		11	東天神原丙古墳	板野　東天神原	古墳	古墳	町	土製管玉、東天神原古墳群
5		12	大塚山西古墳	板野　東天神原	古墳	古墳	町	円墳、大塚山古墳群
6		13	大塚山南古墳	板野　東天神原	古墳	古墳	町	円墳、大塚山古墳群
7		14	大塚山古墳	板野　東天神原	古墳	古墳	町	円墳、大塚山古墳群
8		15	大塚山東古墳	板野　東天神原	古墳	古墳	町	円墳、大塚山古墳群
9		16	迫乙古墳	板野　迫	古墳	古墳	町	
10		17	迫甲古墳	板野　迫	古墳	古墳	町	
11		18	吉野山古墳	板野　迫	古墳	古墳	町	
12		19	寺ノ山古墳	板野　迫	古墳	古墳	町	
13		20	山畑古墳	板野　山畑	古墳	古墳	町	
14		21	坂本古墳	板野　山畑	古墳	古墳	町	円墳
15		22	鎧塚古墳	板野　山畑	古墳	古墳	町	
16		23	西天神原横穴群	板野　西天神原	古墳	古墳		
17		24	葉山古墳	築地　葉山	古墳	古墳		須恵器
18		25	保生園内古墳	今　吉野・丸山	古墳	古墳	町	
19		26	西窪横穴群	出木　西窪	古墳	古墳	町	須恵器
20		27	出木居屋敷横穴群	出木　居屋敷	古墳	古墳		須恵器
21		33	熊寺古墳	宮地　宮本	古墳	古墳		
22		36	宮本横穴群	宮地　宮本	古墳	古墳		
23		41	城の鼻古墳群	隈庄　古城	古墳	古墳		
24		42	城の鼻横穴群	隈庄　古城	古墳	古墳		
25		51	沈目奥野	沈目　奥野	古墳	集落		
26		52	甚九郎山古墳	沈目　奥野	古墳	古墳		鉄刀、須恵器
27		53	沈目横穴群	沈目　奥野	古墳	古墳		土製管玉
28		56	狐塚古墳	陣内　狐塚	古墳	古墳		
29		59	天ノ平横穴群	陣内　錦川	古墳	古墳		
30		63	土鹿野古墳	鵜瀬　免ノ上	古墳	古墳		
31		66	権現尾古墳	鵜瀬　権現尾	古墳	古墳		
32		73	鏡ノ巣古墳	鵜瀬　免の本	古墳	古墳		
33		81	影熊古墳	阿高　影熊	古墳	古墳		円墳
34		82	阿弥陀尾横穴群	阿高　影熊　・山口	古墳	古墳	町	須恵器　・　亀甲人骨
35		83	御領横穴群	東阿高　八ツ尾	古墳	古墳	町	須恵器
36		85	アンドン坂横穴群	東阿高　千々屋寺	古墳	古墳	町	亀甲人骨
37		87	一位田横穴群	東阿高　一位田	古墳	古墳	町	須恵器
38		88	ウシクビ横穴群	東阿高　一位田	古墳	古墳	町	須恵器
39		89	一尾横穴群	東阿高　一尾	古墳	古墳	町	須恵器
40		90	岸古墳群	東阿高　岸	古墳	古墳		
41		95	塚原古墳群					
			丸尾第1～4号古墳	塚原　丸尾	古墳	古墳	国	円墳
			りゅうかん塚古墳	塚原　丸尾	古墳	古墳	国	円墳
			将軍塚古墳	塚原　丸尾	古墳	古墳	国	円墳、鏡、玉、短甲など
			くぬぎ塚古墳	塚原　丸尾	古墳	古墳	国	円墳
			日焼塚古墳	塚原　北原	古墳	古墳	国	勾玉、管玉、小玉
			北原第1～2号古墳	塚原　北原	古墳	古墳	国	2号は円墳
			石ノ室古墳	塚原　北原	古墳	古墳	国	円筒状石製品、突起のある家型石棺
			花見塚古墳	塚原　北原	古墳	古墳	国	鉄剣、鉄鏃、金環、銅鏃
			琵琶塚古墳	塚原　丸山	古墳	古墳	国	円筒埴輪
			三段塚古墳	塚原　丸山	古墳	古墳	国	円墳
			丸山第1～5号古墳	塚原　丸山	古墳	古墳	国	円墳
			土取塚古墳	塚原　丸山	古墳	古墳	国	前方後円墳
			塚原	塚原　上ノ原	古墳	包蔵地	国	
42		96	上ノ原	塚原　上ノ原	古墳	包蔵地		
43		102	櫨野横穴群	藤山　櫨野	古墳	古墳		須恵器
44		103	ハシゴダン横穴群	藤山　古川	古墳	古墳	町	須恵器
45		104	鶴横穴群	藤山　鶴	古墳	古墳		
46		105	長原横穴群	藤山　長原	古墳	古墳	町	
47		106	南ハゼノ古墳群	藤山	古墳	古墳		
48		107	六地蔵第1号古墳	藤山　六地蔵	古墳	古墳		円墳
49		108	六地蔵第2号古墳	藤山　六地蔵	古墳	古墳		円墳
50	444	7	下道免横穴群	中山　下道	古墳	古墳		

城の鼻古墳群

丘陵上面の西側に数基の箱式石棺が確認されている。これら古墳は大正末～昭和初あるいは戦後に破壊されたものと思われ、副葬品などの出土遺物も報告されていない。

隈庄城跡

現在の城南町役場一帯が城域で、城の鼻丘陵上が本丸跡であったとされる。明治初年に国の一大事業として編纂された郡村誌に添付された益城郡村図の古城図に、「隈庄城」の絵図がある（第30図）。これには、城の鼻丘陵上は「天守跡」とされ、その南の一部城南小学校校庭にかかる箇所が「二ノ丸跡」、県道を挟んだ東の城南町役場あたりが「ニノ天守跡」とされる。

南北朝期末に今川了俊がこの地に一時築城して以降、戦国期には菊池氏が一時拠点とし、次いで鹿子木氏の家臣野中氏、天文年間には阿蘇氏の家臣甲斐氏が拠城したとされる。この天文年間に戦国期の本格的な築城がなされたと考えられている。現存する城の構えは当時の所産と思われる。

城の規模については、慶安4年（1651）4月28日に細川綱利が国中絵図に添えて幕府に提出した調査控に、「一、隈庄古城、平山城曲輪四百七拾間、右之古城より隈庄町迄一町弐拾間」とあり、周囲約854mの城郭であったことになる。

第3節　周辺の関連遺跡

1.　横穴墓

第1節で述べたとおり、城の鼻横穴群の周辺には舞原・塚原の両台地を中心に多数の横穴群が確認されている。特に浜戸川流域及びその支流に集中しており、おおまかに、当該横穴群を含む舞原台地西端地域、雁回山北東裾地域、舞原台地南東地域の3地域に区分される。このほか、舞原台地北側の緑川に面した吉野山周辺にも横穴群が確認されている。その数は20群477基以上とも言われ、県内最大級の横穴墓集積地帯といえる。ここでは、上述の4地域における横穴群の概要について以下に記す。

吉野山周辺地域

吉野山（標高88.7m）を中心とする丘陵や台地には多くの古墳や横穴墓が所在し、古墳群を形成する。当地域では4群が確認されている。いずれの横穴群も防空壕等により破損が著しく、遺存状況は極めて悪い。今村横穴群では20数基、平野の西天神原西方の斜面に位置する西天神原横穴群では単室の3基の横穴墓が確認されている。西窪横穴群と出水居屋敷横穴群は舞原台地の東崖面に所在し並列することから同一群と考えられる。それぞれ10数基と数基が確認されており、西窪群からは7世紀中葉の須恵器が採集され、7世紀の構築とされる。

舞原台地西端地域

舞原台地の西端には古墳は顕著に認められず、弥生時代に続いて集落地であったと考えられる。当地域では、城の鼻横穴群のほか宮本横穴群の1群のみである。城の鼻横穴群の北、舞原台地の西崖面に5基確認されており、防空壕等により破損が著しく、遺存状況は極めて悪い。

雁回山北東裾地域

浜戸川の小支流により複雑な小谷を形成した当地域には、その崖面に多数の横穴墓が群集する。その数270余基とも言われ、浜戸川流域でも特に集中する地域である。塚原古墳群より500～1500mの間にあって、前者と一帯を為す古墳群であるとみられる。当地域では、阿高地区に7群、尾窪地区に4群の計11群が確認されている。

阿高地区では副葬品として亀甲が出土することを特色とする。御領横穴群は約10基確認されており、そ

のうち5基が完全な状況で残存する。「コ」字形の3屍床をもつ形態で、枕を彫り出した横穴墓も認められ、羨門部上縁に円形の彫刻（陽刻）を施すものもある。阿弥陀尾横穴群は小園谷を夾む西崖面と東崖面に数段にわたって群集する。西崖面83基、東崖面72基の計155基が確認されており、当地域の最大規模を誇る。平面プランは隅丸長方形を為し、天井形態は寄棟型は少なく、多くはかまぼこ型、ドーム状を為す。屍床は「コ」字形の3屍床を配すが、小さいもので奥屍床のみのものがある。南西部（柿の木迫）では、横穴墓の上の崖面に一文字状の刻線が確認されている。羨門の上縁にあたると思われるが、何らかの事情で掘削を放棄したものと思われる。アンドン坂横穴群は約5基が北・東向きに開口する。飛の尾横穴群は小谷を夾んで西崖面に約40基、東崖面に約29基の計69基ほどが確認されているが、防空壕等の破壊が著しいため正確な数は把握できない状況にある。ウシクビ横穴群は6基中4基が残存する。南向き斜面に位置し、東よりの第2号墳の閉塞石に沈刻線が確認されている。このほか、ウシクビ横穴群の東北約100mの東向き崖面に一位田横穴群（16基）、西100～130mの南及び西向き斜面に一尾横穴群（12基中6基が完形）がある。

尾窪地区の櫨野横穴群は東向き崖面に約15基確認されている。櫨野群と相対する西向き崖面のハシゴダン横穴群では22基確認されているが、崩壊が著しく正確な数は把握できない。鶴横穴群は東南向きの崖面に20基が確認されている。当地域では最も破損が少なく、うち16基が完形である。長原横穴群は鶴群に相対する西北向きの崖面に5基確認されており、破損が著しい。

舞原台地南東地域

舞原台地の南東斜面に位置し、浜戸川の水田地帯を挟んで南1.5kmの塚原古墳群と相対する古墳群の一角を為す。当地域では、2群が確認されている。沈目横穴群は丘陵西南～南斜面に6基確認されている。天ノ平横穴群は南及び西向き崖面に数段にわたって群集する。63基確認されているが、未発見や壊滅を合わせると2倍近くあったことが想定される。構造は雁回山北東裾地域の尾窪群と変わらないが、大小ある。このほかに下道免横穴群があるが、天ノ平群に隣接し同一群と考えられる。

2. 中世城跡

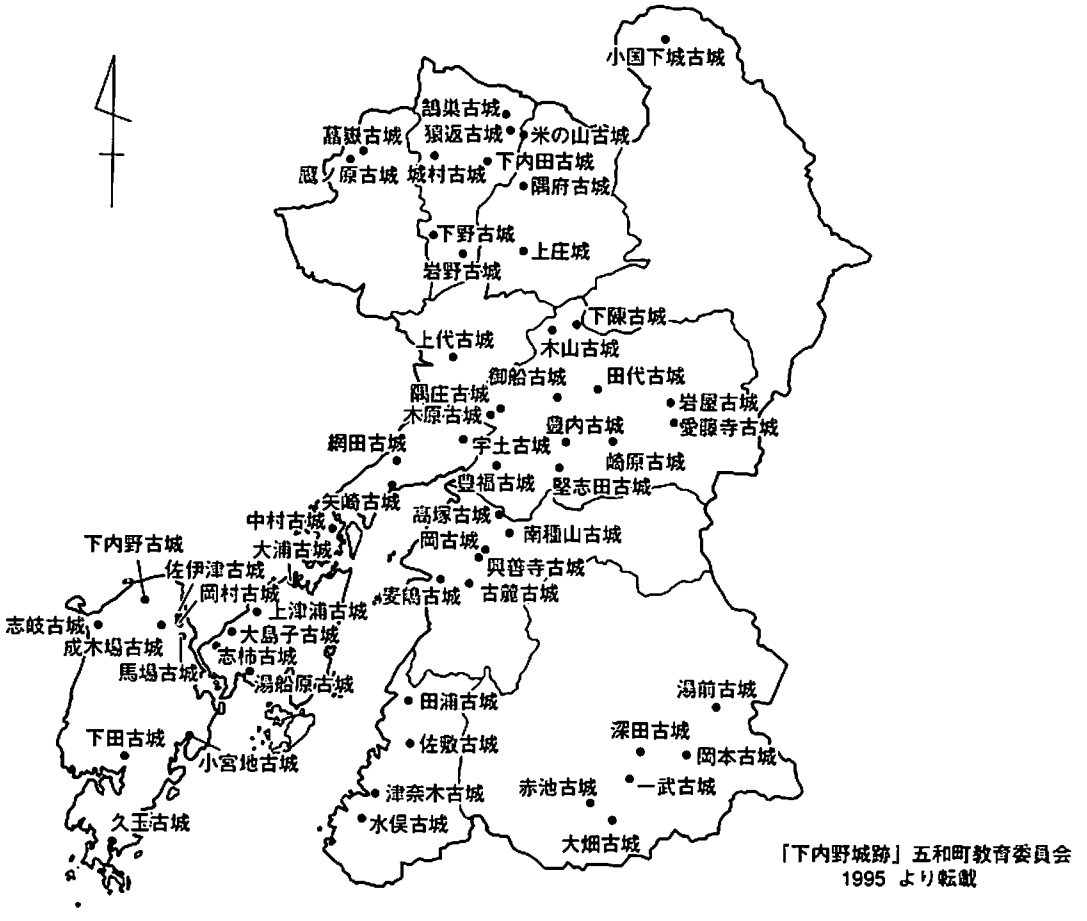
当該地域には隈庄城跡のほか、中世城跡は2城ある。

阿高城跡は木原山の一支脈の東北端に位置し、標高80m、長さ100m、幅30mの台地上に位置する戦国期の城跡である。西側の鞍部には幅9～10mの堀切が築かれている。堀切によって仕切られた長さ10m前後の尾根の背には幅18～20mの平坦部が観察される。さらに、城山麓には外堀と称される自然谷（幅30m）が所在し、城跡に結びつく「本村」「一尾」の地名が残る。

陣内城跡は鰐瀬と陣内の中間に所在し、鰐瀬の小字城尾の西北部、陣内の城尾の南部にあたる。古代末～中世初めにおける益城郡司肥宿弥の砦の跡と推定されている。高さ30mの台地の西端で、独立しておらず、阿高、隈庄の2城のような戦国期の要害とは趣を異にする。

第2表　周辺の中世遺跡一覧

No.	市町村	遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備　考
51	341	3	高の石造宝塔	高	中世	石造物	町	正応四年銘、1基個人蔵
52		40	隈庄城跡	隈庄　古城	中世	城	町	瓦出土
53		45	熊仁寺跡	下宮地　居屋敷	中世	寺社	町	文永2年創建、最古の禅寺
54		58	近道原	陣内　近道原	縄文～中世	包蔵地		
55		64	陣内城跡	陣内　城尾	中世	城		
56		65	照山寺跡	鰐瀬　北口	古代・中世	寺社	町	平安末、豊田荘々寺、石造物
57		80	阿高火葬墓跡	東阿高　城山	中世・近世	墓地		骨製笄・蔵骨器
58		86	阿高城跡	東阿高　城山	中世	城		
59		93	目覚古墳裾	塚原	古代・中世	包蔵地		蔵骨器
60		94	火葬場裏古墳北	塚原　丸山	古代・中世	包蔵地		蔵骨器
61		97	尾窪火葬墓跡	藤山　後田	中世	包蔵地		蔵骨器
62		99	山ノ神蔵骨器出土地	鰐瀬　山ノ神	古代・中世	包蔵地	町	蔵骨器



第4図　熊本県内における『慶安の差出』記載の中世城跡

第3表　『慶安の差出』記載の益城郡内の中世城跡一覧

地区	城名(現呼称)	種別	規模(間)	所在地	解　　説
益城	木山古城 (木山城)	平山城	248	益城町寺迫・城の本	木山氏の居城。丘陵の上面城に三区画の平場。最上段区画が「本丸」。平面に竪堀の残部。公園化
	田代古城 (戸上城)	山城	350	御船町田代・戸上	阿蘇氏の支城。戸上集落は標高340mの丘陵地。集落内に「本城」「倉床」。
	御船古城 (御船城)	平山城	254	御船町御船・下囲	甲斐宗運の城。「下囲」の独立丘陵「城山」が城跡。西麓に「上囲」。(伝)加藤時代に外堀を埋める。
	愛藤寺古城 (愛藤寺城跡)	山城	2000	矢部町白藤	阿蘇大宮司の居城。小西時代は結城平次が城代。城跡に「本丸」「二の丸」「三の丸」「城門」。
	岩尾古城 (岩尾城)	平山城	760	矢部町城原・本丸	愛藤寺古城とセット関係。尾根筋に「本丸」「二の丸」「三の丸」。県立矢部高校の敷地は、浜の館跡。
	崎原古城 (傍島馬入城)	山城	243	砥用町浦井	阿蘇氏の支城。T字形の尾根筋に削り落としによる長さ50mの高台。登城口に「御水殿」湧水地。
	堅志田古城 (堅志田城)	山城	650	中央町中郡・城山	阿蘇氏の最前線基地。県内の最大級の山城。「内城」「詰め城」の複合縄張り。岩盤に掘立柱建物。
	小熊町小城	山城	785	(不明)	所在地・城名とも不明
	豊福古城 (豊福城)	平山城	600	松橋町豊福・下城	名和氏と相良氏で争奪戦。舌状形の低平な丘陵。内堀「城堀」。以前の外堀は水田やレンコン畑。
	木原古城 (木原城)	山城	1144	富合町木原・城山	『慶安の差出』では大規模山城。ただし、主郭の山頂は擂鉢状地形で、約1200m程度。鎮西八郎為朝伝説。
	隅庄古城 (隅庄城)	平山城	470	城南町隅庄	甲斐氏の居城。丘陵末端部の「象の鼻」が城跡。明治の城絵図に「本丸」「二の丸」「三の丸」区画。

※「下内野城跡」五和町教育委員会1995 より転載

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　古墳時代

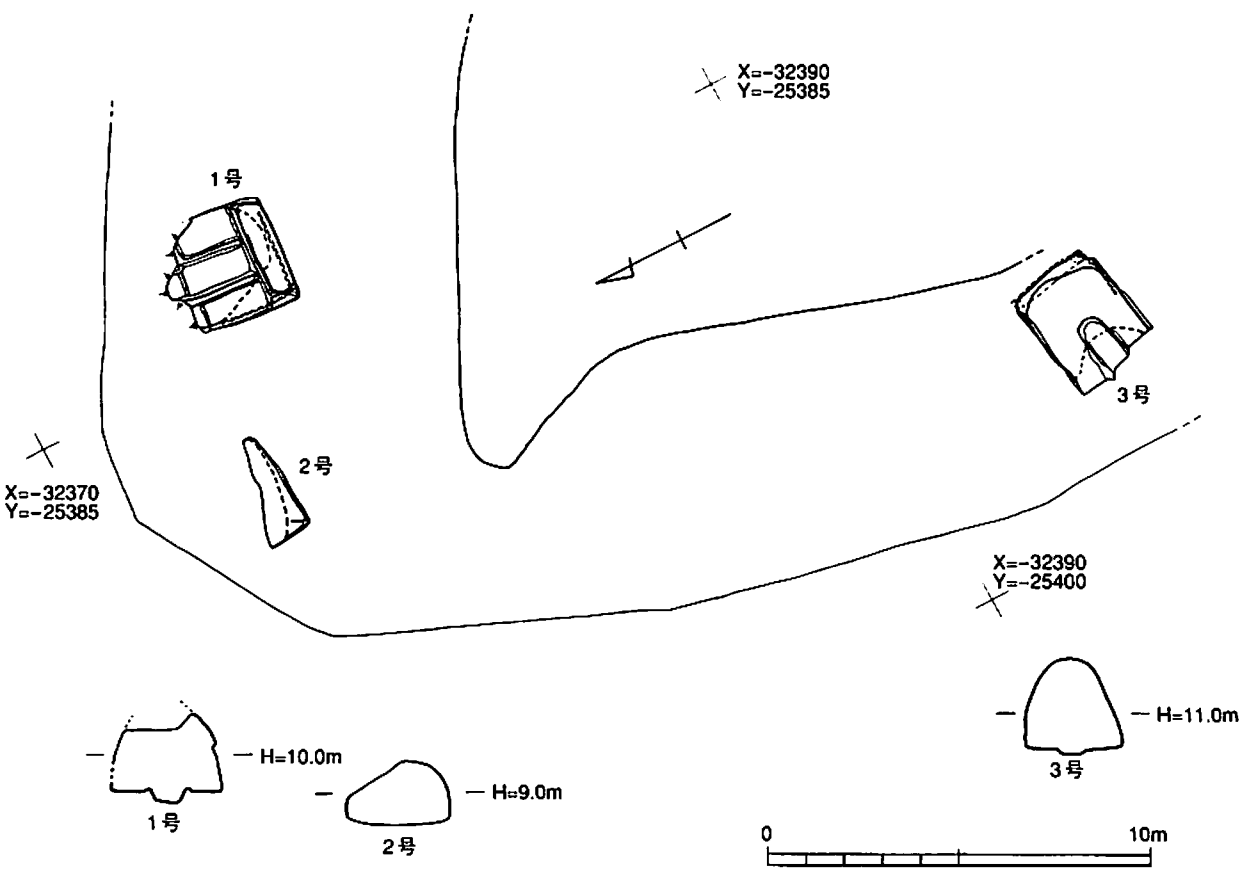
１　横穴墓

当該調査において、Ⅰ区北崖面及び西崖面において3基（1～3号）とⅡ区西崖面において8基（4～11号）の計11基の横穴墓の調査を実施した。そのうち1～7号までは既開口の横穴墓であったが、Ⅱ区において新たに4基（8、9、10、11号）を検出した。各横穴墓の開口方向については、1、2号が北向き、10号が北西方向に開口するほか、すべて西向きとなる。また、垂直分布については、少なくとも2段は認められる。

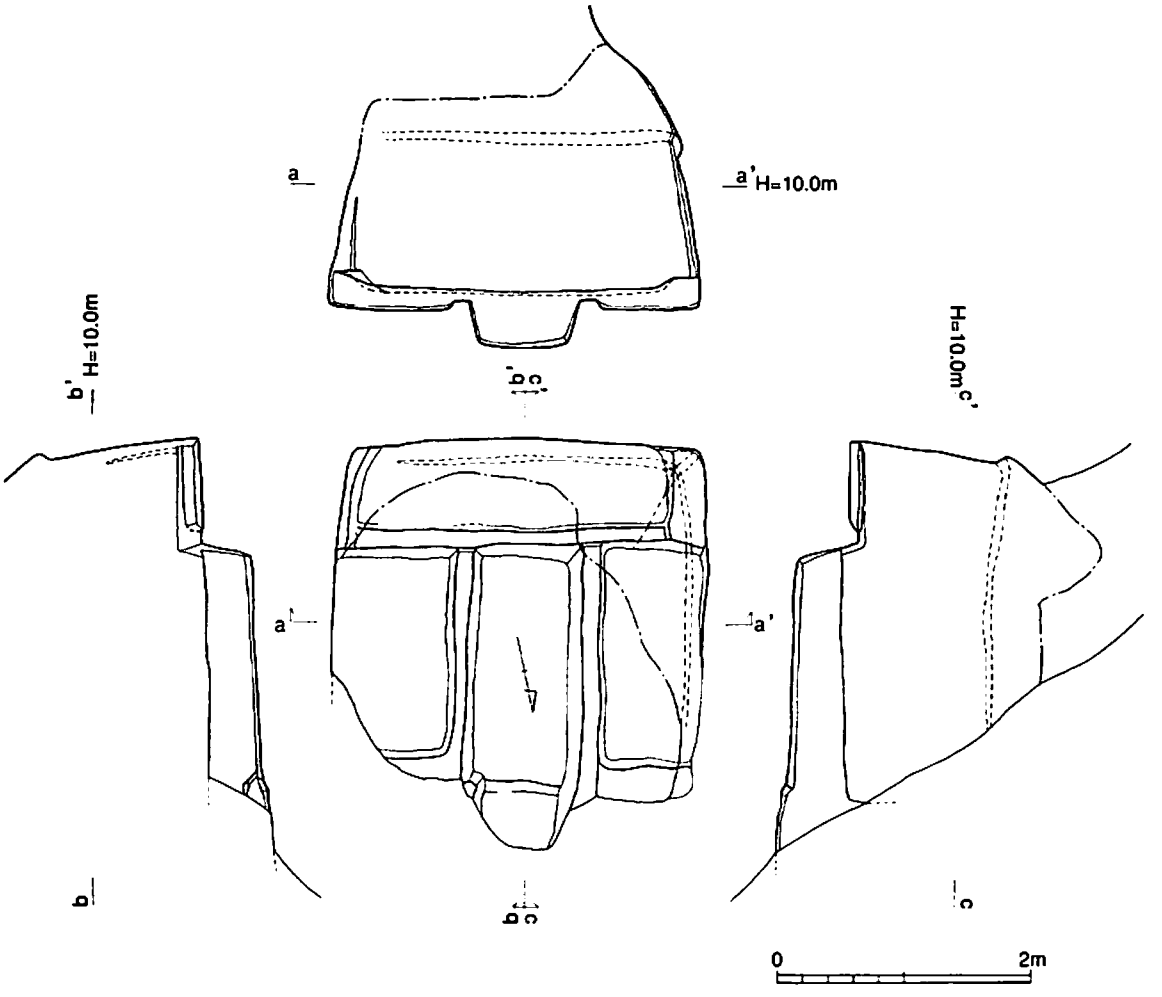
この丘陵崖面は後世の造成により整形された地形で、すべての横穴墓について天井部から前面にかけての欠損が著しく、全体構造が把握できるものは皆無であった。また、防空壕や倉庫としての利用により玄室内は荒らされており、1号、9号を除き埋葬人骨及び副葬品もほとんど検出されない状況であった。

このように欠損が著しいため情報量は少ないが、玄室内の屍床部など横穴墓の主要部分については2、10、11号を除いてある程度残存した状況にあり、玄室の形態的特徴に言及できる資料を得ることができた。

ここでは、各横穴墓の構造及び出土遺物等の調査成果を記す。



第5図　Ⅰ区遺構配置図



第6図　1号横穴墓

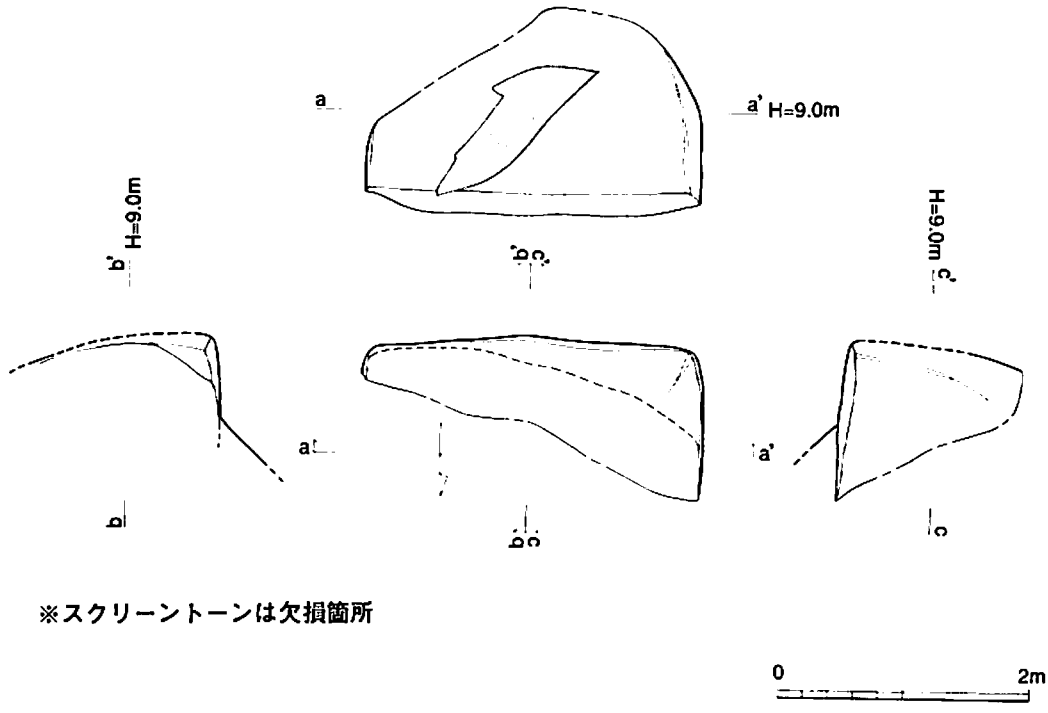
1）1号横穴墓（第6図）

〔検出状況〕　1号横穴墓は、羨門から側壁・天井部の大半とさらに左屍床の一部が欠損した状況で検出された。

〔構造〕　玄室の平面形はほぼ方形を呈し、長さ270cm、幅286～295cmを測る。玄室内は、仕切によって奥屍床・左屍床・右屍床に区分され、「コ」字形の配置をとる。

3屍床はほぼ長方形を呈し、奥屍床287×62～70cm、左屍床192×91cm、右屍床192×73～78cmを測る。奥屍床は比較的細長く、左右屍床に比べ10～12cm程高い。また、各屍床の側端部はそれぞれ段状の高まりを有し、奥屍床の左右端で12cm、左屍床の前端で7cm、右屍床の前端で10cmを測る。仕切は各屍床の前面に明確に造り出し、奥屍床の仕切は側端部近くで上がり、やや弧状を呈する。通路は上端幅91～95cmと左右屍床とほぼ同幅となり、深さ33cmの断面逆台形を呈する。仕切に付設される排水溝は認められなかった。

奥壁は81度に内傾しながら直線的に立ち上がり、右側壁は中程で僅かに膨らみをもち80°の傾斜で立ちあがる。左側壁は破損しているが、右側壁と同様の造りと思われる。天井部は欠損が著しく棟線等は不明であるが、軒先を外方向に張り出させて明瞭に造り出しており、天井形は寄棟形を呈するものと思われる。また、棟から軒先隅へ延びる線が僅かに残存しており、その延長から推察すると開口部は平側になるものと思われる。



第7図　2号横穴墓

〔出土遺物等〕　玄室内の床面直上から7点の遺物を検出したが、石斧など後世の遺物も含まれており、原位置を保っているものは皆無と思われる。当該墓に伴う遺物はそのうち4点で、玄門近くの通路から須恵器甕の胴部片、玄室前壁近くの右屍床から須恵器甕の底部片、奥屍床奥壁側の中央よりやや右から土師器甑の脚部片、奥屍床の左端近くから碧玉製管玉が出土した。

須恵器甕の胴部片（第19図4）は、外器面に格子目文タタキを施し、内器面に同心円の当て具痕が残る。甕の底部片（第19図5）は、外器面に斜方向の平行タタキ後、回転ナデ調整を施す。内器面は密なタタキを施した後、底部は不整方向のナデ調整を施す。

土師器甑の脚部片（第19図6）は、脚端部を横方向の篦削りで整え、外器面に縦方向の刷毛目調整、内器面に縦方向の篦削りを施す。

碧玉製管玉（第20図2）は、長さ2.43cm、径0.8cmの円筒形で、孔径は0.1～0.3cm。孔は両側から穿たれており、中途で段違いとなる。丁寧な作りをしており、暗緑灰色を呈する。

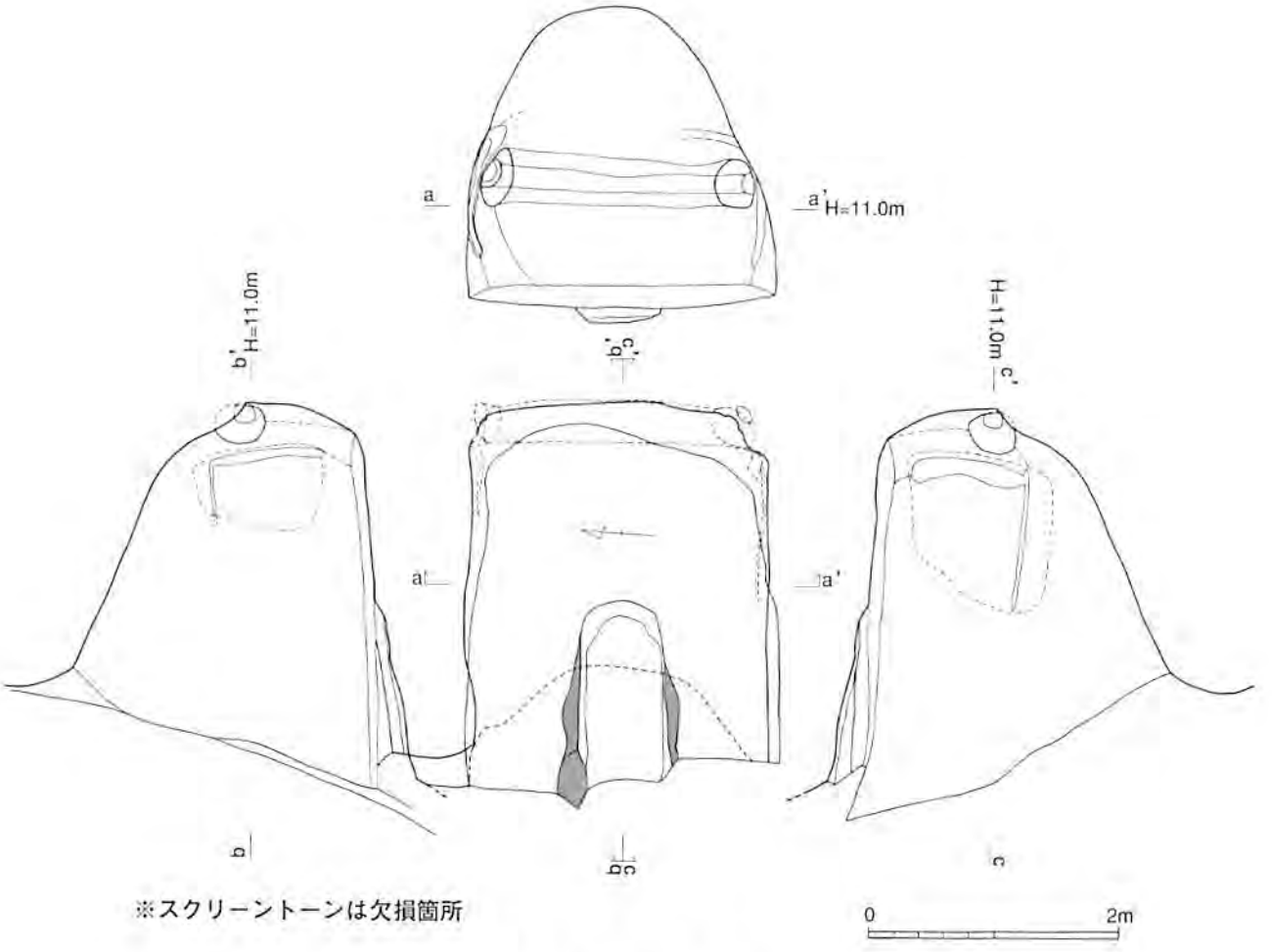
2）2号横穴墓（第7図）

〔検出状況〕　2号横穴墓は、奥・側壁及び奥屍床の一部が残存するのみで大半が欠損した状況で検出された。

〔構造〕　玄室の平面形は、奥屍床の部分で幅270cmを測るほか、計測不能で判然としない。ただし、1号横穴墓に比べて奥屍床幅は15～20cm程狭い。玄室内の床面は、群内の横穴墓同様、奥・左右屍床に区分される「コ」字形の配置をとるものと思われる。

奥壁は内傾し、右側壁は中程でやや膨らみをもちながら立ち上がる。天井部の軒先は崩落により不明瞭である。軒先隅から棟へ延びる線が僅かに残存する。天井形は不明である。

〔出土遺物等〕　玄室内における埋葬人骨及び副葬品の出土は認められなかった。



第8図　3号横穴墓

3）3号横穴墓（第8図）

〔検出状況〕　3号横穴墓は、後世に物置として改造されたということもあり、側壁・奥壁・床・天井部等が削平を受けた状況で検出された。さらに奥の両隅には現床面から高さ約80㎝程度の位置に直径約40㎝、深さ約30㎝の穴が横方向に掘られており、後世に木材を横に渡して棚として利用されていた。

〔構造〕　玄室の平面形は、現況で長さ250㎝以上、幅240㎝のほぼ長方形を呈する。玄室内は、通路の残存部から奥屍床・左屍床・右屍床と「コ」字形の配置をとるものと思われる。各屍床の平面規模は仕切等の消失のため不明である。また、通路についても深さは判然としないが、比較的幅広い通路となるようである。

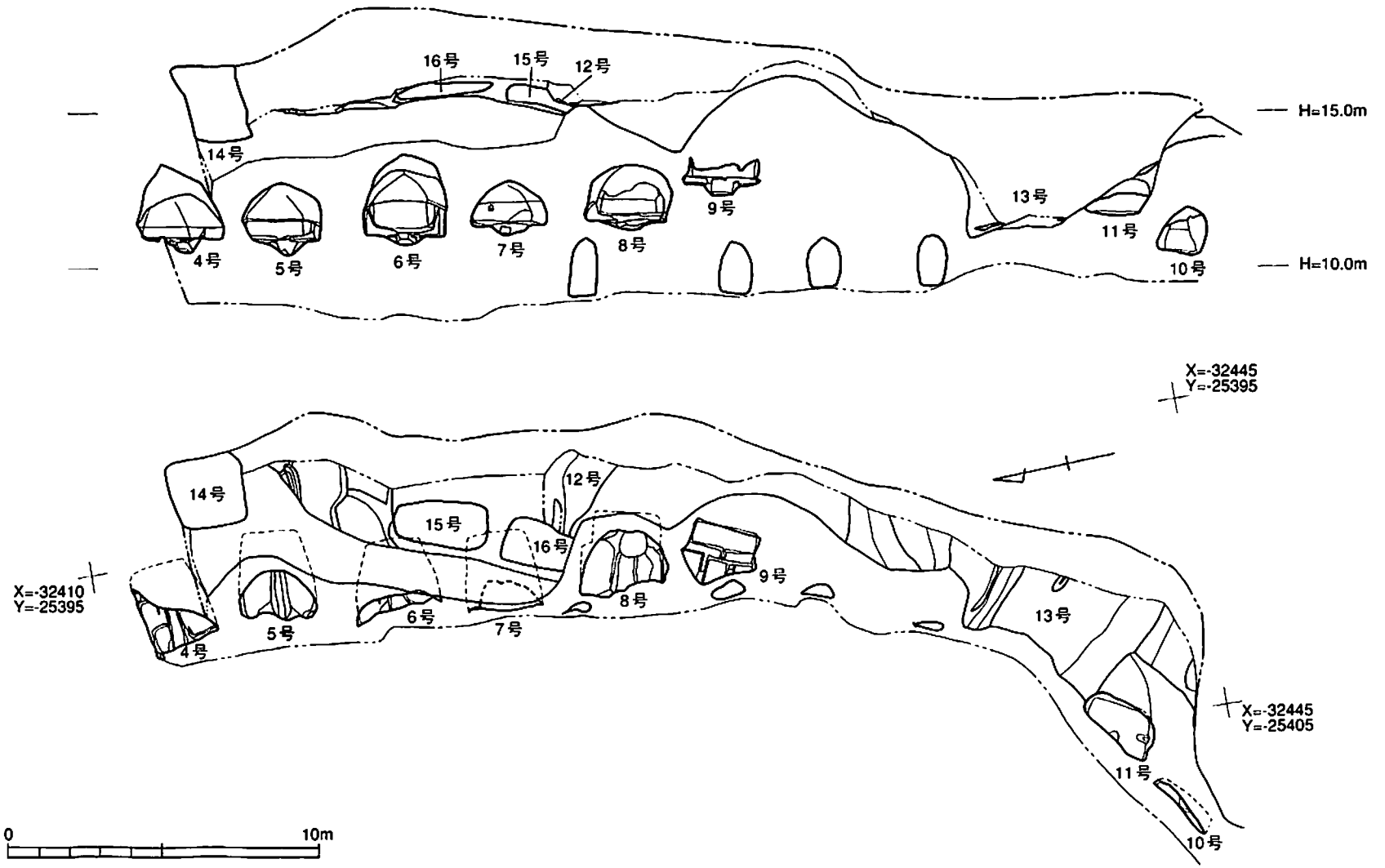
奥壁は削平され判然としないが、両側壁はやや内傾しながら立ち上がる。天井部の棟線は崩落等により不明である。軒先線は両側壁に僅かに残存し、外方向への張り出す造りが看取された。天井形は不明である。

〔出土遺物等〕　玄室内での埋葬人骨及び副葬品の出土は認められなかった。

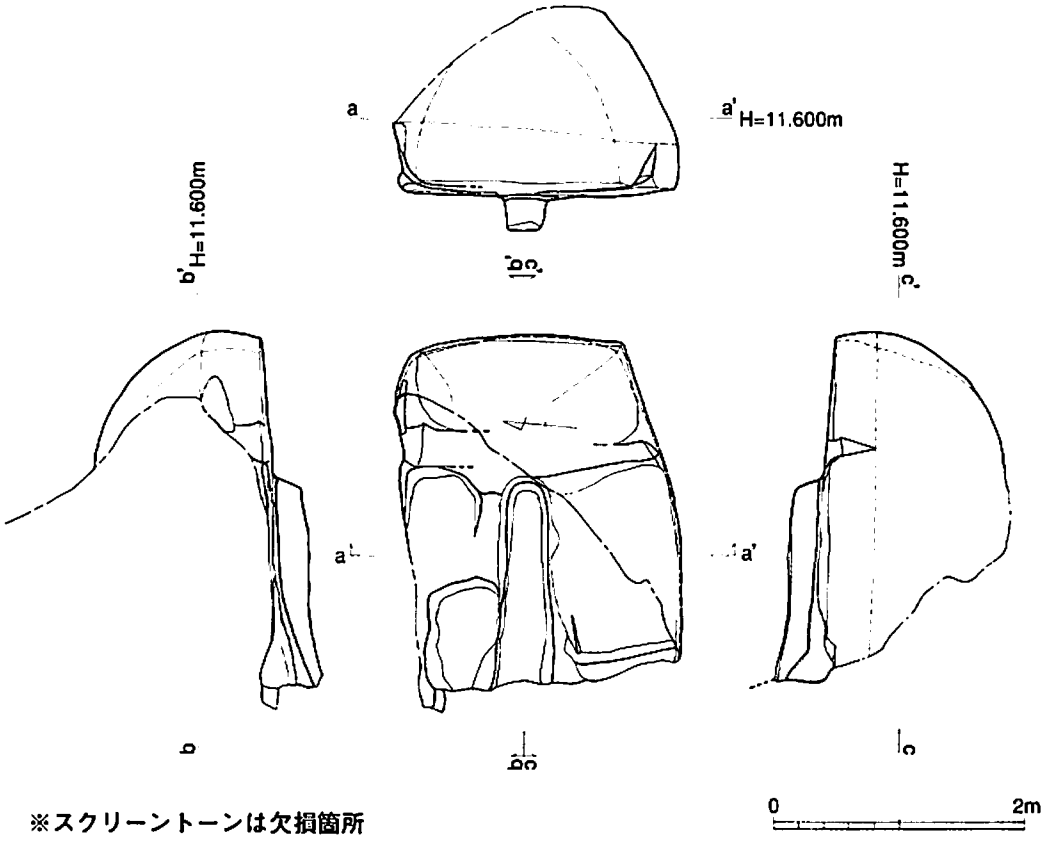
4）4号横穴墓（第10図）

〔検出状況〕　4号横穴墓は、玄門から天井部の大半及び左側壁の大半を欠損した状況で検出された。左屍床前面及び右屍床前面の右際に前壁の一部が僅かに残存した。

〔構造〕　玄室の平面形は、長さ276㎝、幅174～214㎝以上と奥壁に向かいやや幅の狭まる台形を呈する。


16号
15号
12号
14号
4号
5号
6号
7号
8号
9号
13号
11号
10号
H=15.0m
H=10.0m
X=-32445
Y=-25395
X=-32410
Y=-25395
X=-32445
Y=-25405
0
10m

第9図　Ⅱ区遺構配置図



※スクリーントーンは欠損箇所

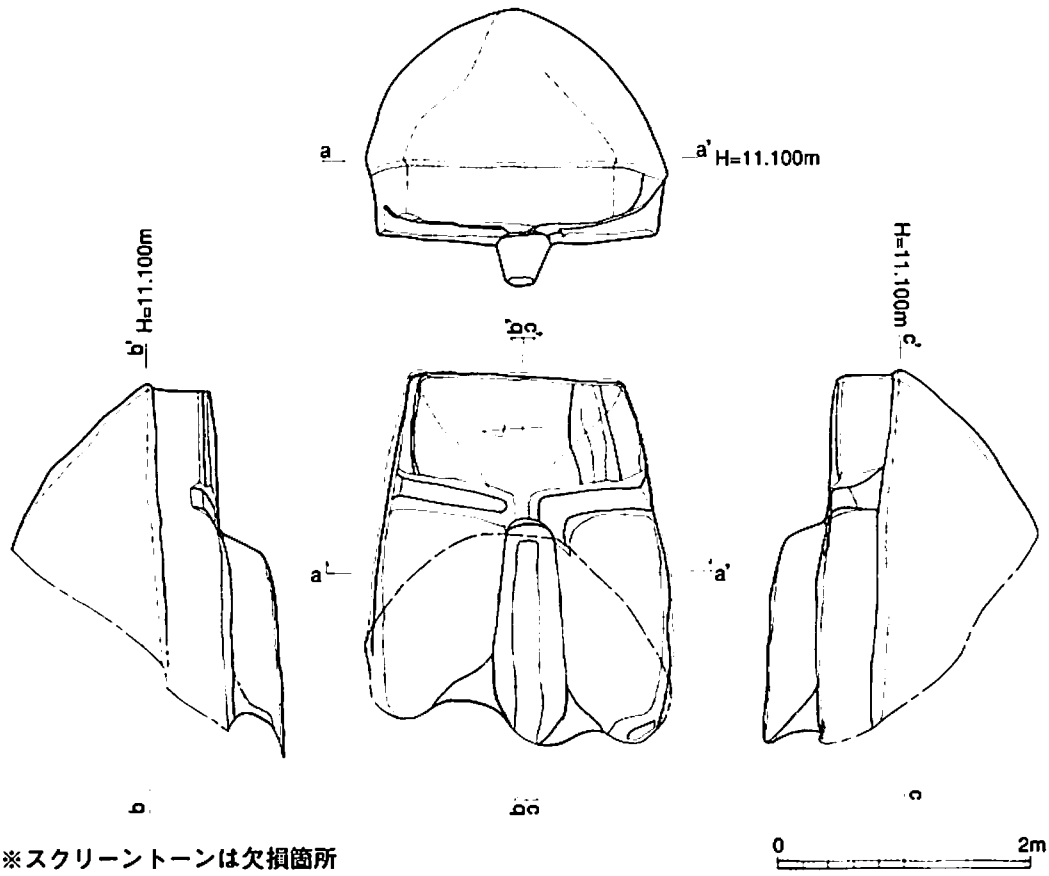
第10図　4号横穴墓

玄室内は、奥屍床及び左右屍床と「コ」字形に3屍床を配置する。

3屍床の平面形はほぼ長方形を呈する。奥屍床は、左壁側に比べ右壁側を幅広に造り出しており、180×68～78cmを測る。右屍床は141×81cmを測る。左屍床は欠損が著しく、長さは判然としないが、幅約53cmと右屍床に比べて幅狭である。奥屍床と左右屍床との間には段差はほとんど認められない。仕切は奥屍床前面の左右際及び右屍床前方に僅かに認められる程度。奥屍床の仕切は側端部近くで上がり、やや弧状を呈する。通路は比較的深く造り出しており、上端幅34～47cmと前面に向かって広がり、深さ28cmの断面逆台形を呈する。

奥・側壁については丸みを持ちながら立ち上がる。天井部の棟線は崩落等により不明瞭で、軒先線は屈曲のみによって表現される。軒先隅から棟へ延びる線が僅かに残存し、その状況から天井形はアーチ形を呈するものと思われる。

〔出土遺物等〕　玄室内の埋土中から石臼片など後世の遺物は認められたが、埋葬人骨及び副葬品の出土は認められなかった。



※スクリーントーンは欠損箇所

第11図　5号横穴墓

5）5号横穴墓（第11図）

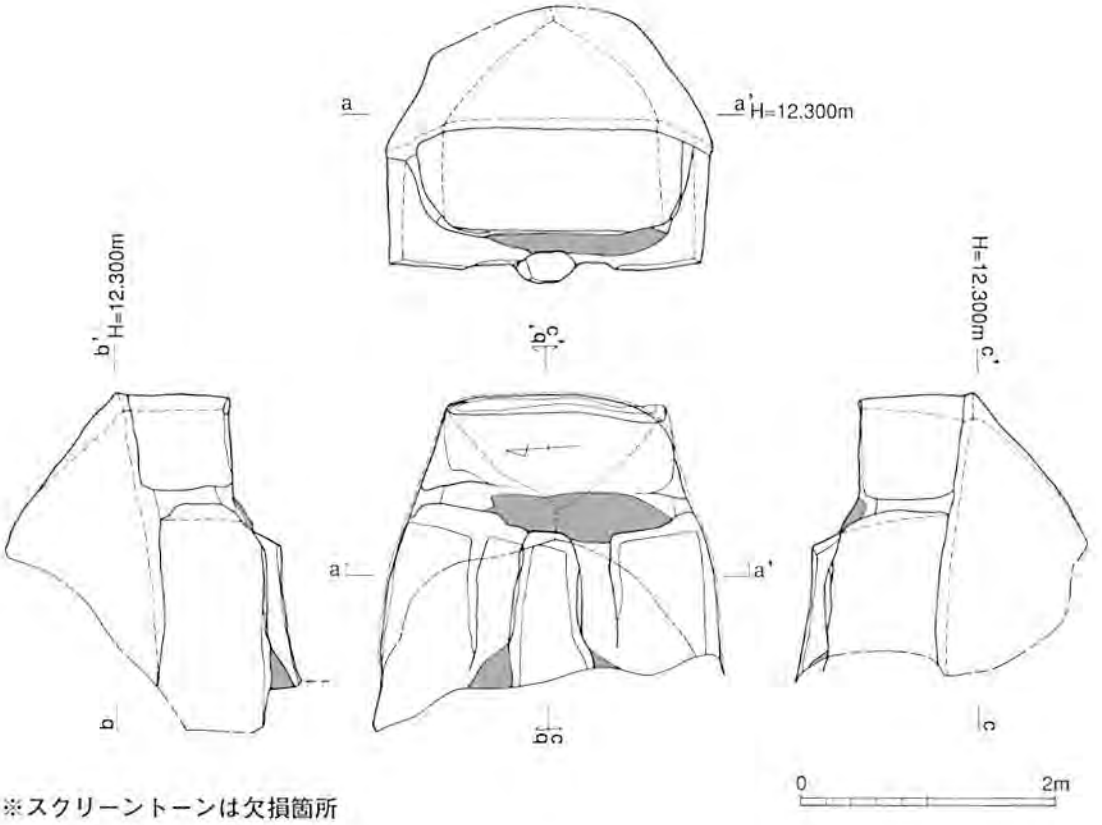
〔検出状況〕　5号横穴墓は、玄門から天井部にかけての大半を欠損した状況で検出された。右屍床前面に前壁の痕跡が僅かに残存した。

〔構造〕　玄室の平面形は、長さ297cm、幅175～249cmと奥壁に向かい幅が狭まる台形を呈する。玄室内は、奥屍床、左右屍床と「コ」字形に3屍床を配置する。

3屍床の平面形はほぼ長方形を呈する。奥屍床は191×75～89cmで中央付近で最大幅となる。右壁際及び左壁際を段状に高く造り出す。右屍床は172×71cm、左屍床は165×98cmと左右非対象となる。奥屍床と左右屍床に比べ1段高く造り出しているが、11cmと比高差は比較的小さい。仕切は奥屍床前面及び右屍床奥に僅かに認められる。奥屍床の仕切は側端部近くでやや上がり、仕切中央に断面U字形の排水溝を造り出す。通路は上端幅34～57cmと前面に向かって拡がり、深さ37cmの断面逆台形を呈する。

奥壁は直線的に立ち上がり、両側壁はやや外傾気味に立ち上がる。天井部の軒線は崩落等により判然としないが、軒先は外方向への張り出しを伴う明瞭な造りである。軒先隅から棟へ延びる線が僅かに残存し、その状況から天井形は寄棟形となり、開口部は妻側になるものと思われる。

〔出土遺物等〕　玄室内の埋土中から、陶磁器片、土師質土器片、瓦片などの後世の遺物が多く認められ、撹乱されているものと思われる。大型の巻貝片のほか、埋葬人骨及び副葬品の出土は認められなかった。



※スクリーントーンは欠損箇所

第12図　6号横穴墓

6）6号横穴墓（第12図）

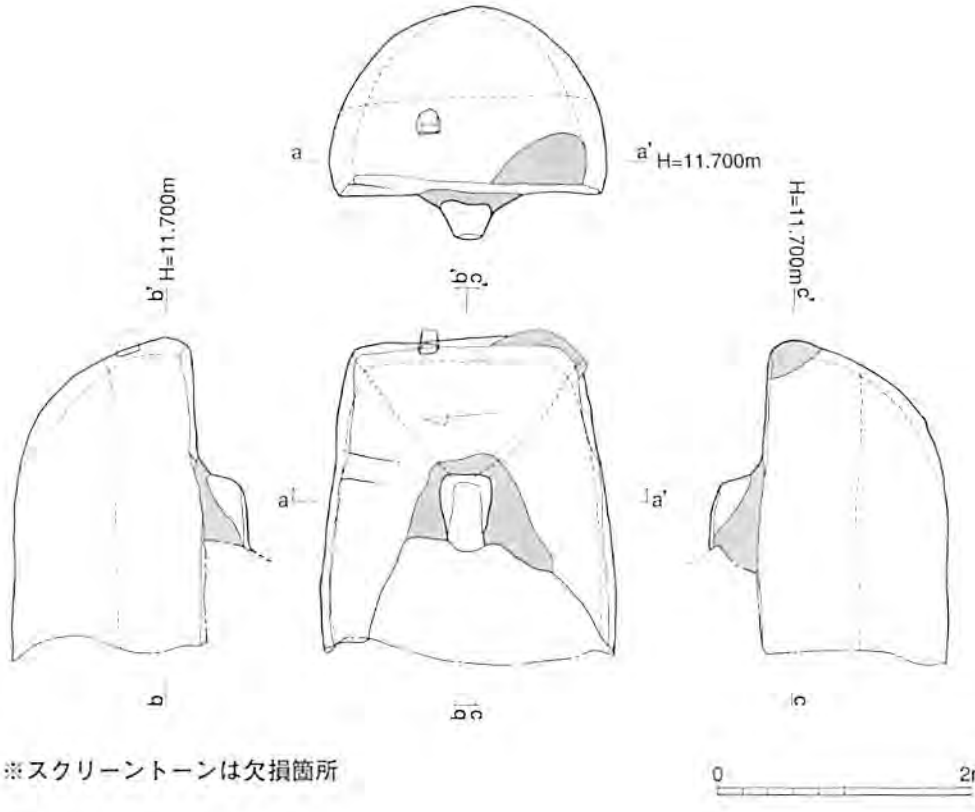
〔検出状況〕　6号横穴墓は、玄室前半分から天井部の大半を欠損し、奥屍床前面も欠落した状況で検出された。

〔構造〕　玄室の平面形は、左右屍床部から奥壁に向かって狭まる最大幅280㎝の略台形を呈し、玄室内は、奥屍床、左右屍床と「コ」字形に3屍床を配置する。

3屍床の平面形はほぼ長方形を呈す。奥屍床は182×64㎝を測り、奥壁際に幅14㎝の小溝を造り出す。左右屍床は前半分が消失しているため長さは不明であるが、残存幅は右屍床で61～69㎝、左屍床54～71㎝を測る。左屍床はやや弓なりとなる。奥屍床は左右屍床から23㎝高く造り出している。奥屍床前面は欠落し判然としないが、仕切は23～32㎝と比較的幅広く造り出す。奥屍床の仕切は側端部が上がる弧状を呈する。通路は上端幅47㎝、深さ15㎝と断面逆台形を呈し、比較的浅い幅広の造りとなる。

奥壁・側壁は比較的高く造り出しており、直線的に立ち上がる。天井部は欠損が著しいが、主軸方向に延びる棟線が僅かに残存する。軒先は外方向への張り出しを伴う明瞭な造りである。その状況から、天井形は寄棟形で、開口部は妻側となる。

〔出土遺物等〕　玄室内の覆土中から瓦片が検出されていることから、5号同様攪乱されている。埋葬人骨及び副葬品の出土は認められなかった。



第13図　7号横穴墓

7）7号横穴墓（第13図）

〔検出状況〕　7号横穴墓は、玄室前方から天井部にかけて欠損し、通路際も欠落した状況で検出された。

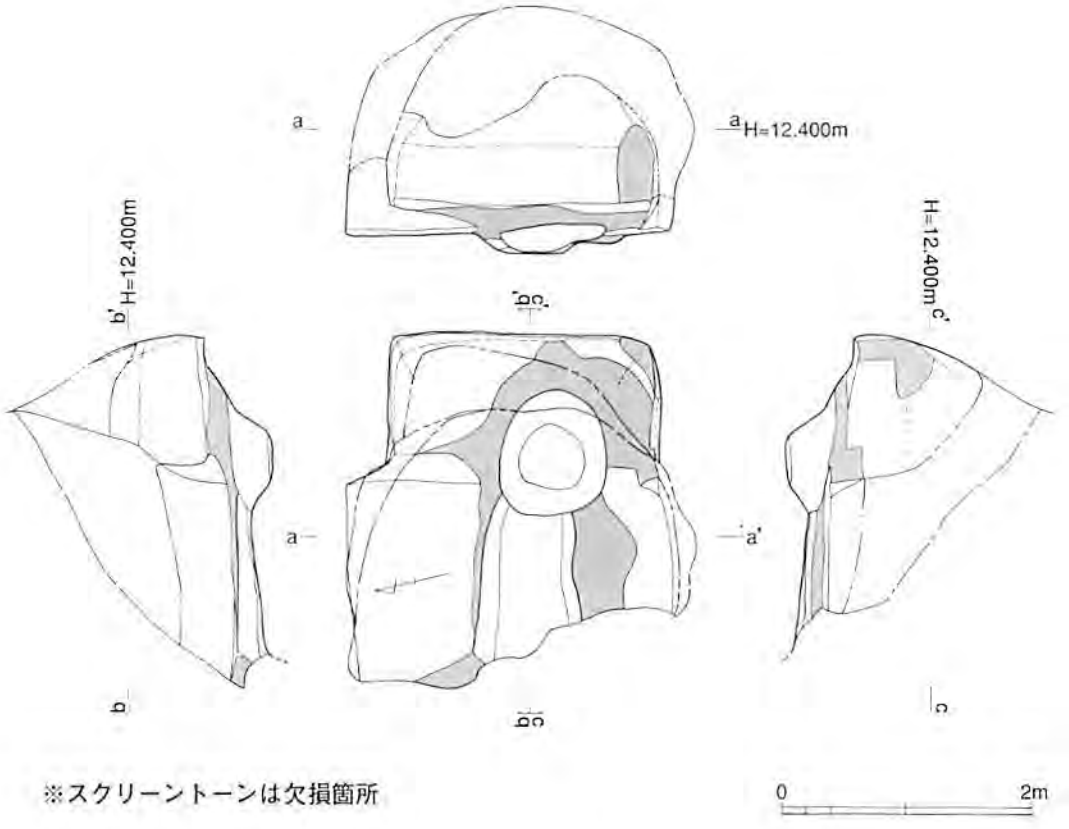
〔構造〕　玄室の平面形はやや奥が狭まるが、ほぼ長方形を呈する。玄室内には、奥屍床、左右屍床と「コ」字形に3屍床を配置する。

奥屍床はほぼ長方形を呈し、181×87㎝を測る。左右屍床は欠損が著しく判然としない。仕切はやや奥屍床の左壁際に残存するのみである。奥屍床と左右屍床の段差はほとんど認められない。通路上端の残存幅は41㎝、深さ38㎝の断面逆台形を呈する。

奥・側壁は中程で膨らみ、内湾気味に立ち上がる。奥壁中央からやや左、高さ約40㎝程に位置する、幅18㎝、高さ21㎝のドーム型の小穴は灯明台の可能性があるが、当該遺構に伴うかどうかは判然としない。

天井部は崩落が著しく棟線は判然とせず、軒先は屈曲のみで表現される。軒先隅から棟へ延びる線を僅かに認められ、天井形はアーチ形を呈するものと思われる。

〔出土遺物等〕　玄室内の埋土中から、近世陶磁器片、瓦片など後世の遺物が多く認められたほか、副葬品と思われる遺物として、須恵器の坏蓋片（第18図3）を一括採取した。小片で規模などは不明であるが、長さ9㎜のやや内傾する返りを持つ。天井部は残存形状からやや扁平となる。このほか、埋土中から骨片を採取した。既に攪乱を受けている状況から、埋葬人骨かどうかは判然としない。



第14図　8号横穴墓

8）8号横穴墓（第14図）

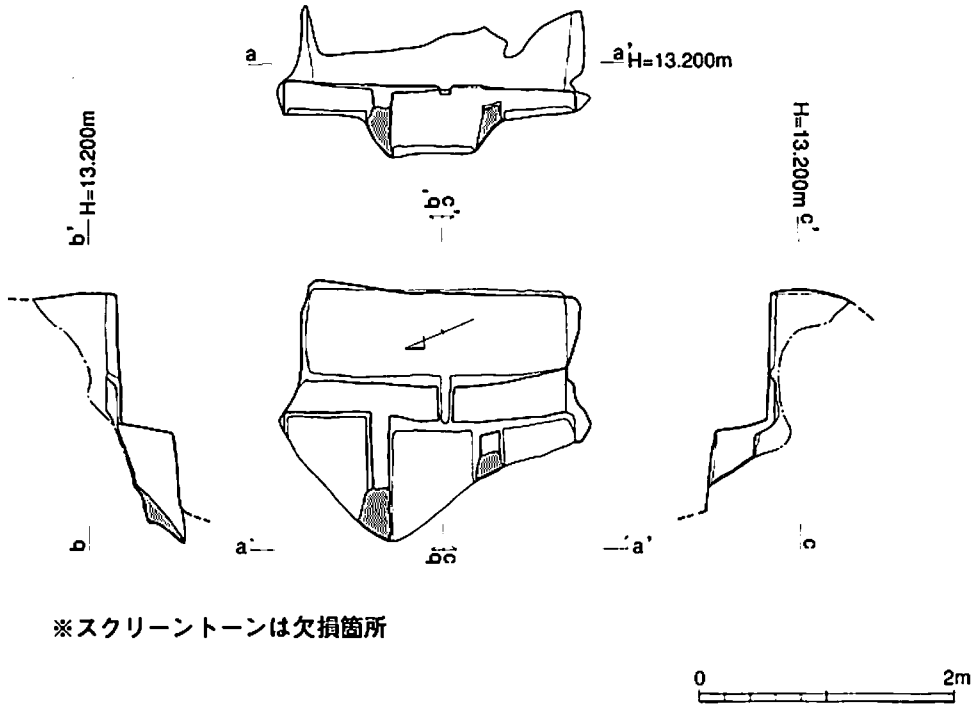
〔検出状況〕　8号横穴墓は、玄室の右屍床前半部と天井部の大半を欠損した状況で検出された。残存部も欠損が著しく、奥屍床と右屍床の境には径86～90㎝程の円形孔（防空壕の通気口）が穿たれていた。

〔構造〕　玄室の平面形は、奥屍床部を明確に幅狭に造り出す平面形を呈する。玄室幅は最大約284㎝を測る。玄室内は奥屍床、左右屍床と「コ」字形に3屍床を配置する。

3屍床とも長方形を呈する。奥屍床は長さ212㎝を測る。幅は前述の円形孔などの欠損箇所により仕切が消失しているため不明である。右屍床幅75㎝、左屍床幅97㎝と右屍床が狭い。奥屍床と左右屍床との段差は18～24㎝を測る。仕切は消失により不明である。通路は残存幅66～84㎝、深さ19㎝の断面逆台形を呈し、比較的浅い幅広の造りとなる。

奥壁は中程で膨らみ内傾しながら立ち上がり、側壁はほぼ直線的に立ち上がる。天井部の欠損が著しく、棟線は崩落等により判然とせず、軒先線も現況では屈曲のみの表現となる。軒先隅から棟へ延びる線も僅かに認められるが、天井形は判然としない。玄室の平面形状から寄棟形の可能性は高い。

〔出土遺物等〕　玄室内の埋土中から陶磁器片、瓦片、すり鉢片など後世の遺物が大量に認められた。埋葬人骨は検出できなかったが、5号横穴墓同様、大型の巻貝片を検出した。



第15図　9号横穴墓

9）9号横穴墓（第15図）

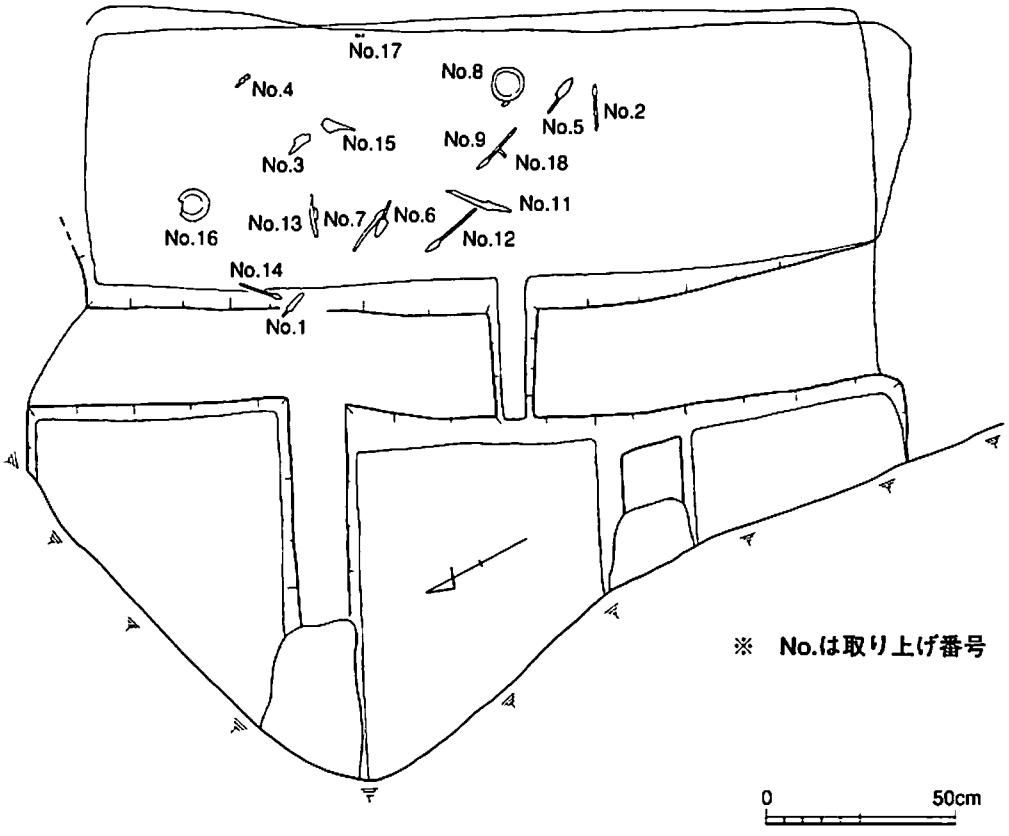
〔検出状況〕　9号横穴墓は、玄室の大半が欠損した状況で検出された。残存箇所は奥屍床部と奥壁の一部、左右屍床の3分の1程度であるが、廃絶後、比較的早い段階で埋没したものと思われ、比較的良好な状態であった。

〔構造〕　玄室の平面形は、奥屍床のくびれは若干あるものの台形に近い形状を呈するものと思われる。玄室幅、玄室長は不明。玄室内は奥屍床、左右屍床と「コ」字形に3屍床を配置する。

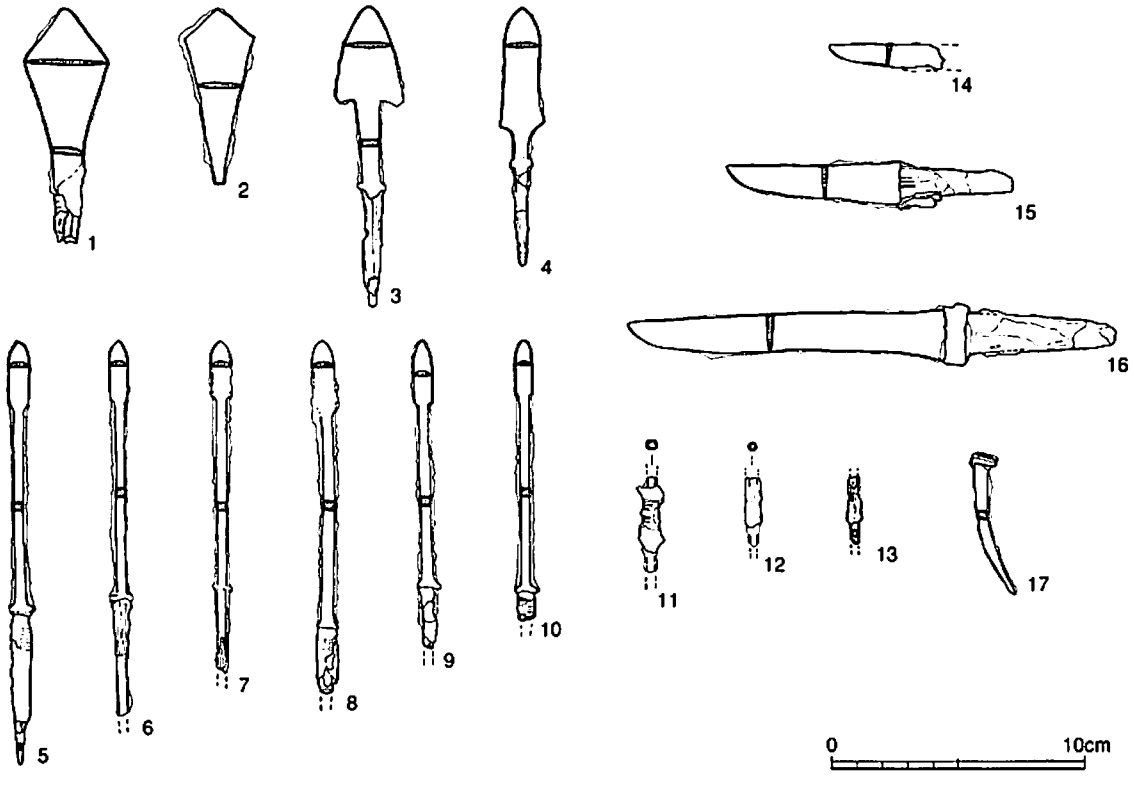
3屍床とも長方形を呈する。奥屍床は208×65cmを測る。左右屍床については欠損が著しく判然としないが、残存幅は右屍床で56cm、左屍床で64cmと右屍床がやや狭い。奥屍床と左右屍床との段差は15cmを測る。仕切は奥屍床で幅24～33cm、左右屍床で幅14～16cmとやや広めとなる。奥壁前面仕切の中央よりやや左に幅10～13cmの排水溝を造り出す。通路は、幅74cm、深さ47cmの断面逆台形を呈し、比較的深い幅広の造りとなる。

天井部・側壁は欠損して不明であるが、奥壁の一部が残存しており、ほぼ直線的に立ち上がる。

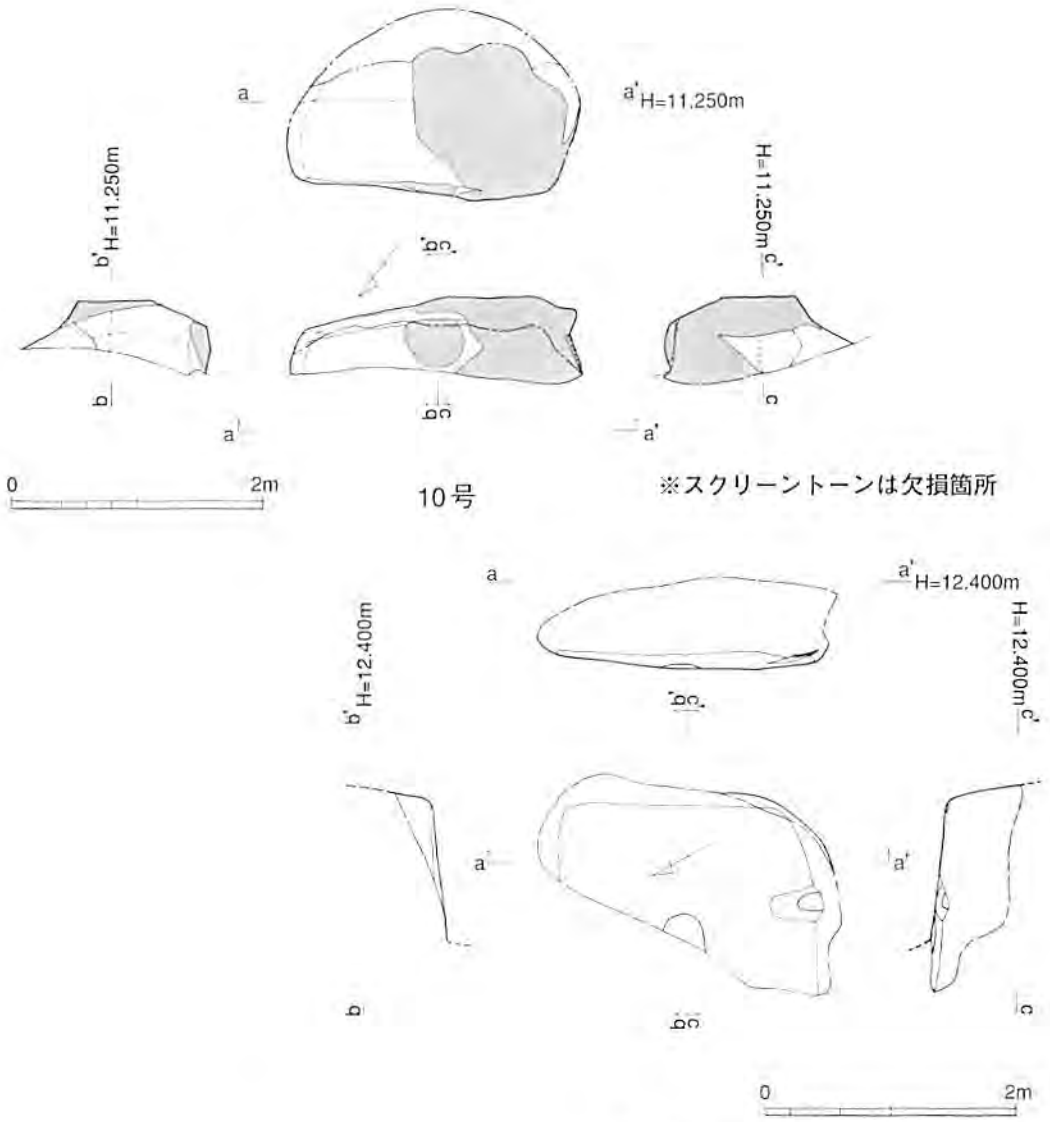
〔出土遺物等〕　玄室内の奥屍床面から、鉄鏃片13点以上、刀子3点、鉄釘1点などの鉄製品、須恵器の坏蓋、短頸壺を各1点、ガラス製小玉2点と埋葬人骨に伴う歯2点を検出した（第16図）。当該墓は先述したとおり比較的早い段階で天井部の崩落に伴い埋没したおり、これらは原位置に近い出土地点を示す遺物と考えられる。なお、鉄釘1点、ガラス製小玉2点は埋土一括資料である。



第16図　9号横穴墓出土遺物配置図



第17図　9号横穴墓出土鉄製品



第18図　10、11号横穴墓

鉄鏃（第17図1～13）は形態的に4種に分類される。1、2は圭頭広根斧箭式鏃である。1は茎部近くでやや屈曲を伴うタイプで、最大身幅3.2㎝を測る。茎部に木質が残る。2は完形品で、全長6.7㎝、最大身幅2.7㎝を測る。3は棘箆被広鋒両丸造三角形鏃である。ほぼ完形で、全長11.7㎝、身長6.9㎝、刃部長3.8㎝、刃部幅2.7㎝、刃部厚0.2㎝を測る。刃部はやや腸抉気味となる。茎部に木質が残る。4は棘箆被両丸造柳葉式鏃である。ほぼ完形で、全長10.0㎝、身長5.8㎝、刃部長4.6㎝、刃部幅1.4㎝、刃部厚0.15㎝を測る。肩部へは削ぎ気味となる。基部に木質が残る。5～10は棘箆被片丸造柳葉式鏃である。5は完形で、全長16.7㎝、身長10.3㎝、刃部長2.5㎝、刃部幅0.8㎝、刃部厚0.2㎝を測る。茎部に木質と樺皮巻きが僅かに残る。6～10は茎部を破損しており、身長9.6～11.1㎝、刃部長2.1～2.6㎝、刃部幅0.65～0.8㎝を測る。すべて茎部に木質を残すが、そのうち8、9、10には樺皮巻きが残る。8はやや歪む。11～13は茎部片である。上述の鏃片の可能性はあるが、現況では接合できない。11のみ断面方形を呈するほか、12、13は断面円形となる。

いずれも木質を残し、11に樺皆巻きが残る。刀子（第17図14～16）は大小3種に分類される。14は最も小さく、棟幅1.5㎜となる。15は残存長11.2㎝、身長6.8㎝、最大身幅1.7㎝、棟幅2㎜を測る。身部はやや上反りとなり、関部は両角関となる。茎部に木質が残る。16は残存長19.2㎝、身長12.6㎝、最大身幅1.9㎝、棟幅3㎜を測る。身部は先端でやや下がり気味となるほか、ほぼ水平を保ち、関部は片角関となるものと思われる。茎部には木質が残り、茎部との境に身部の留め具となる径2.3㎝の円環が残存する。鉄釘（第17図17）は歪みが生じており、頭部から先端までは約5.5㎝を測る。身部は6㎜角の方形を呈し、頭部幅は9㎜となる。

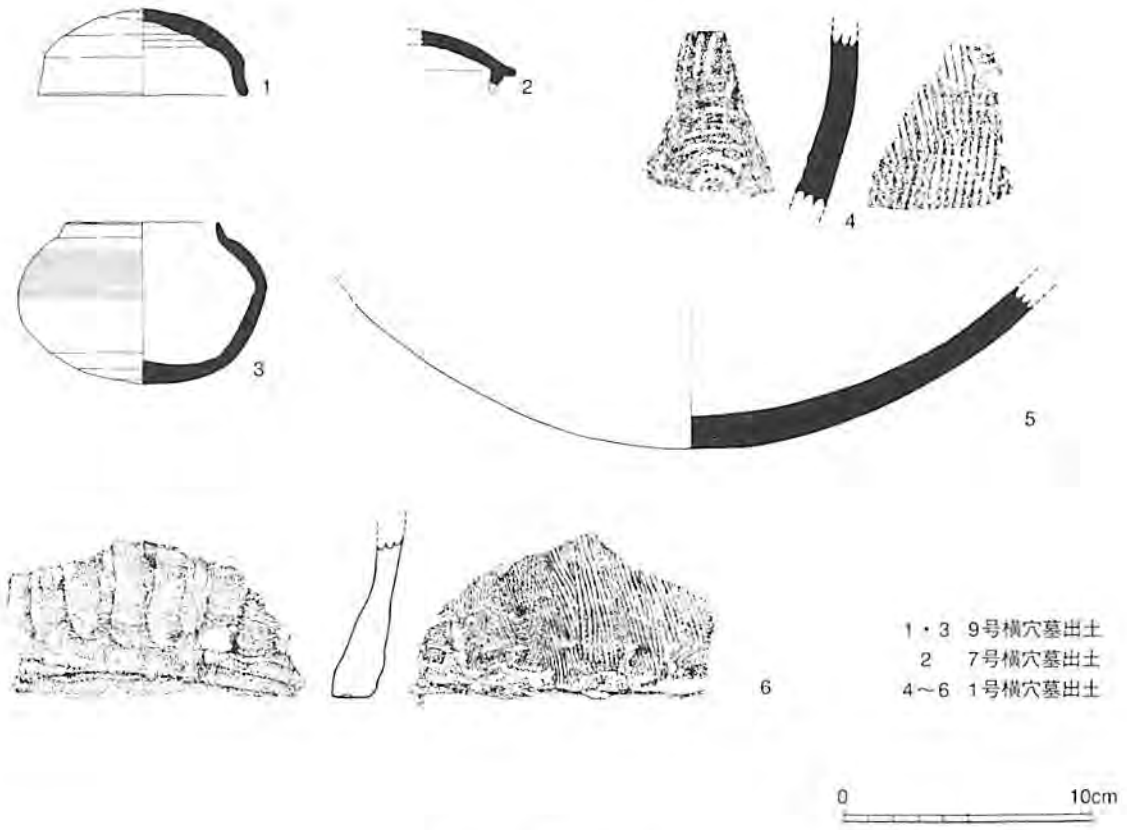
須恵器蓋（第19図1）はほぼ完形で、器高3.4㎝、口径8.2㎝と比較的小さい。天井部と口縁部の境はさほど明瞭ではなく、口縁部はやや湾曲しながら下る。外器面の天井部1／2程に回転ヘラ削り調整を施す。須恵器短頸壺（第19図3）は、器高6.4㎝、口径6.0㎝、胴部最大径は9.9㎝を測る。内器面には丁寧な回転ナデ調整を施し、外器面の頸部から胴部最大径付近まで回転カキ目調整、底部に回転ヘラ削り調整を施す。全体的に、歪みもさほどない丁寧な作りである。

ガラス製小玉（第20図3、4）は、3が約0.4㎝、4が約0.3㎝と大小ある。孔径は両者とも1㎜程度。両者とも鮮やかな青色である。

10）10号横穴墓（第18図）

〔検出状況〕 10号横穴墓は、玄室の大半を欠損し、奥屍床と奥壁が僅かに残存した状況で検出された。奥壁右側も樹根により欠落する。

〔構造〕 玄室の平面形は不明であるが、奥屍床部が前方に向かいやや開くことから、台形を呈するもの



第19図 出土土器

と思われる。奥屍床の残存幅は234cmを測る。

奥壁は中程で膨らみ内傾しながら立ち上がる。天井部の軒先線は屈曲のみの表現となる。かなり形骸化した天井形であることが想定される。

〔出土遺物等〕　玄室内の埋土中から、近世陶磁器片、青磁片などの後世の遺物が多く認められ、埋葬人骨及び遺物の出土は認められなかった。

11）11号横穴墓（第18図）

〔検出状況〕　11号横穴墓は、天井部を含め玄室の大部分を欠損した状況で検出された。奥屍床・奥壁及び側壁の一部と右屍床の一部のみ残存した。

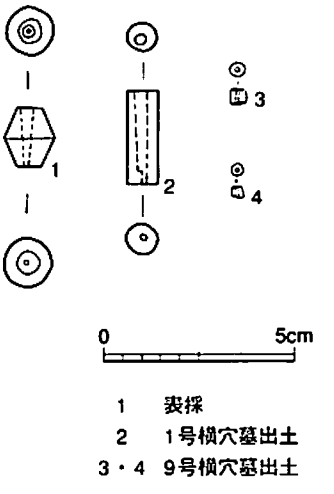
〔構造〕　玄室の平面形は欠損が著しく判然としない。奥屍床はほぼ長方形を呈し、231×72cmを測る。仕切については前面右壁際に僅かに認められる程度である。また、通路部分も僅かに認められる程度で、規模等は不明である。

奥壁の一部がやや内傾するほか、壁面の欠損が著しく判然としない。

〔出土遺物等〕　玄室内の埋土中から、土師質土器の坏身片、甕片などの後世の遺物が多く認められ、埋葬人骨及び遺物の出土は認められなかった。

12）表採遺物

第1次調査の際、3号横穴墓から南へ約13m程の地点で、工事施工業者により切子玉（第20図1）が採集された。水晶製で、長さ1.5cm、最大径1.22cm、切口径0.6cmを測る。孔径は1～3.1mmで、一方向からの穿孔である。どの横穴墓に付随するものか特定できないが、参考資料として掲載した。



第20図　出土玉類

2　その他の遺構

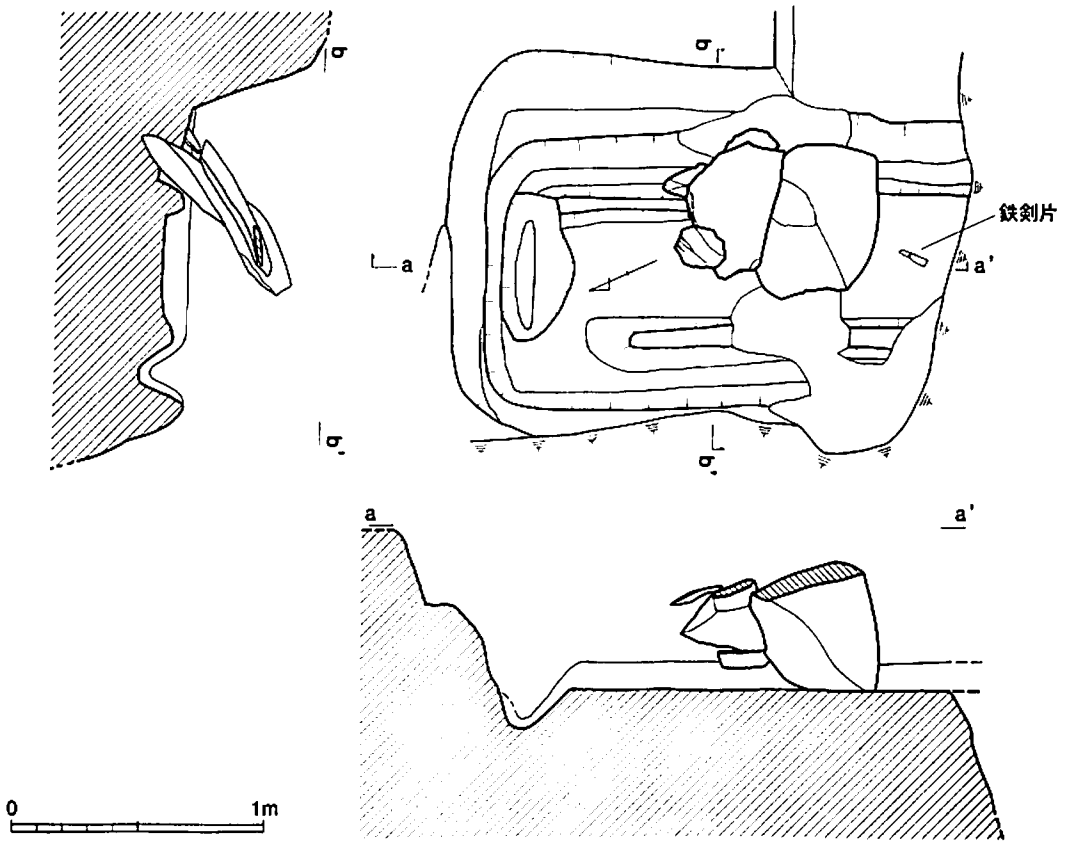
このほか、古墳時代の遺構として、Ⅱ区の丘陵西縁から、箱式石棺1基（15号）と土壙1基（16号）を検出した。ここでは、それら遺構の構造及び出土遺物等の調査成果について記す。

1）15号箱式石棺（第21図）

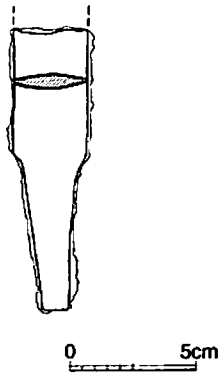
〔検出状況〕　15号箱式石棺は、掘削当初、露出していた石材が閉塞石と認識され横穴墓の可能性が指摘された。しかし、掘削を進めるうちに、露出石材の前面から屍床部が検出され、石棺石材の一部であることが判明した。当該箇所は丘陵西縁で西側及び南側は崖面となっており、当該遺構の西・南側はすでに消失し、石材のほとんども抜き取られた状況にあった。

〔構造〕　平面形は、西壁、南壁が消失しており判然としないが、長さ206cm以上、幅151cm以上の南北に長い方形を呈するものと思われる。石棺の石材はほとんどが抜き取られており、東壁際に数点残存していた石材も内傾した。石材は比較的大きく、54～83cmの扁平な安山岩を使用する。屍床部の平面規模は残存長149cm、幅37～48cmを測る。残存する3壁際には石材嵌め込みのための幅25cm程度の溝が残存する。屍床部には明褐色粘質土を貼り、この土が嵌め込み溝にも充填されていることから、石材を嵌め込んだ後、屍床部を整形したことが推測される。

〔出土遺物等〕　屍床部の南寄り中央から、鉄剣片（第22図）を検出した。茎部から身部にかけての残



第21図　15号箱式石棺



第22図　15号箱式石棺出土鉄剣

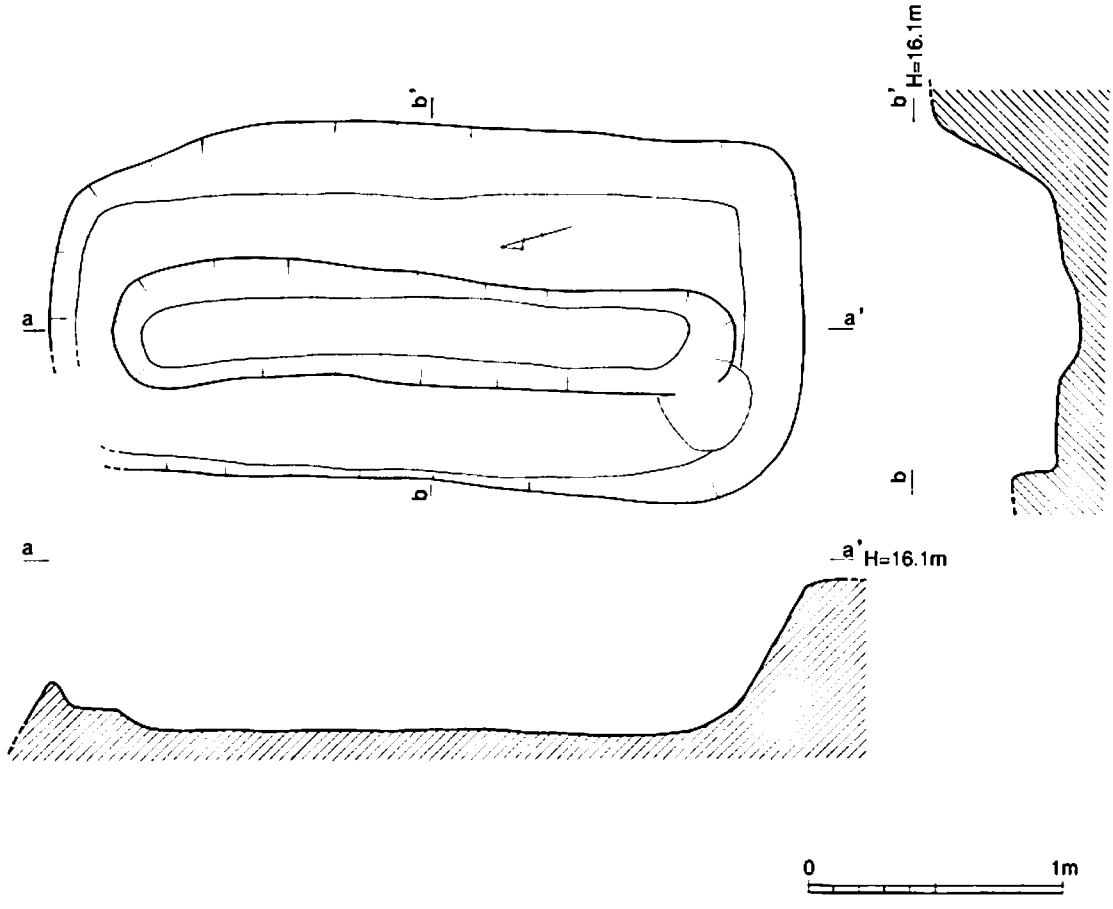
存で、残存長11.0cm、茎部長5.9cm、身部幅3.0cm、身部厚さ0.5cmを測る。関部は両側とも削ぎ関風となり、茎部は僅かに片側に寄る。錆が厚く付着するため、現況では目釘孔は確認できない。

2）16号土壙（第23図）

〔検出状況〕　16号土壙は、15号の北側に直列した状況で検出された。15号同様、ある程度掘削して判明した遺構であり、埋土等の詳細な観察はできなかった。北壁、西壁は欠損しており、全体規模についても不明である。

〔構造〕　平面形は、残存長299cm、幅141cmを測り、南北に長い長方形を呈する。断面形は、深さ42cmの逆台形となる。主軸方向の底中央に、長さ248cm、幅44～47cm、深さ6～12cmの溝状の窪みを有する。底及び壁面下部には、しまりの強い暗赤褐色粘質土（凝灰岩粒を少量含む）が最大厚約10cm程度残存していた。当該遺構については、この中央の溝状の窪みを木棺の据え付け溝と捉え、木棺直葬墓の可能性がある。

〔出土遺物等〕　埋土中から遺物等の出土は認められなかった。



第23図　16号土壙

第2節　中世

1　遺構

Ⅱ区において、隈庄城跡関連の遺構と思われる中世の竪坑1基（12号）、堀切1基（13号）、不明遺構（14号）を検出した。ここでは、これら遺構の構造及び出土遺物等について記す。

1）12号竪坑（第24図）

〔検出状況〕　12号竪坑は、Ⅱ区北端近くの丘陵西縁に位置する。当初、横穴墓と想定されたが、掘削を進めているうちに坑が縦方向に延びることが確認され竪坑であることが判明した。

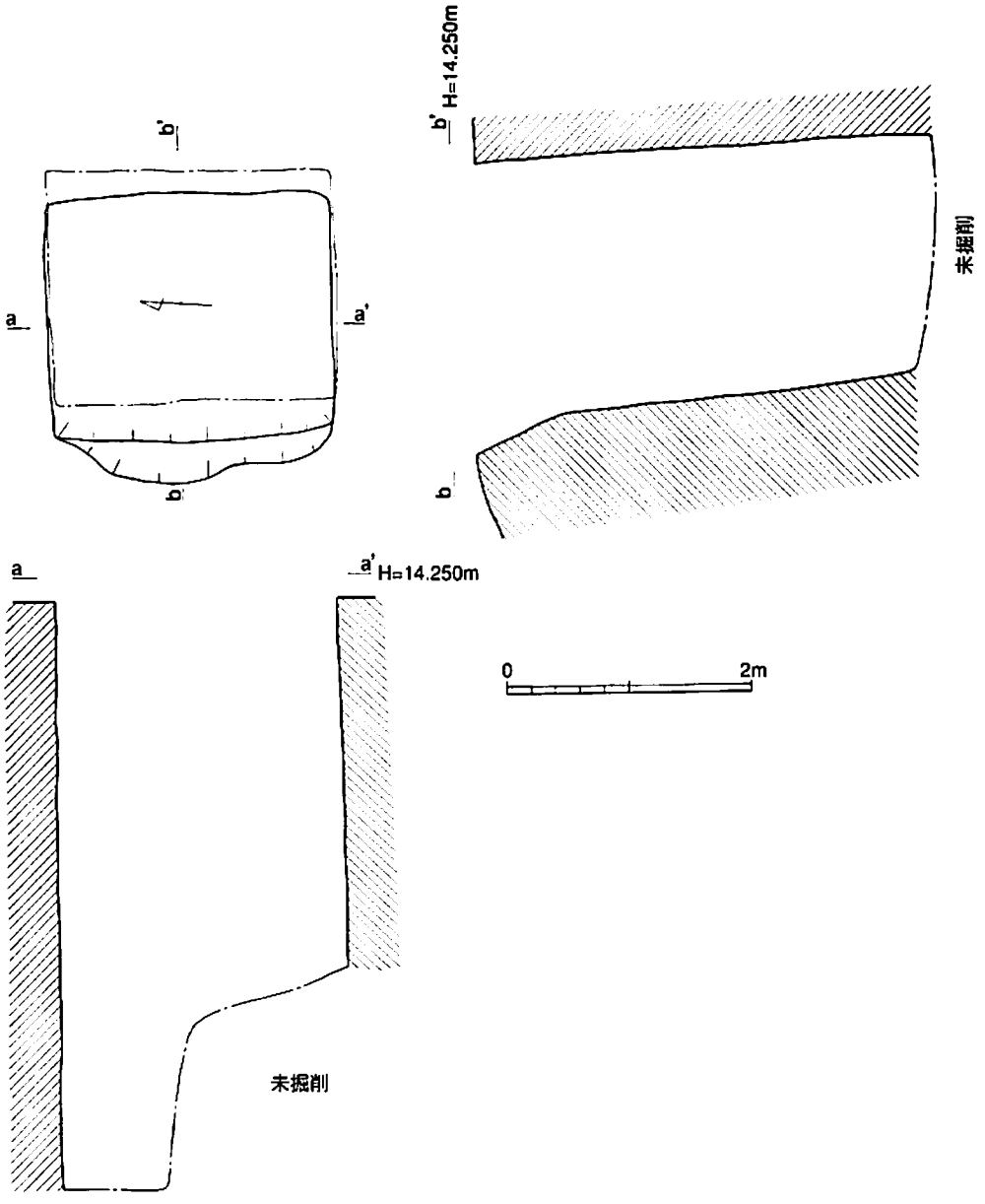
〔構造〕　平面形は上端部で東西軸250㎝、南北軸233㎝のほぼ正方形を呈し、西壁がやや内傾するほか、ほぼ垂直に下りる立断面を有する。深さ472㎝のところで危険防止のため掘削を中止した。

調査を中断したため当該遺構の性格については明言できないが、形状等により井戸跡と思われる。

〔出土遺物等〕　埋土中から軒丸・軒平を含む比較的多くの瓦や石臼、石塔の残欠、坏片など隈庄城関連の遺物が多量に出土した。このほか、骨片、大型の巻貝片などの出土も認められた。

2）13号堀切（第25図）

〔検出状況〕　13号堀切は、Ⅱ区南端近くの丘陵崖面上に位置する。12号同様、当初、崖面中位からの



第24図　12号竪坑

掘込みであることから横穴墓の残欠と想定して掘削を進めたが、形状・規模等に相違点が見出され、堀切であることを確認した。北西側は崖により切断され、南東側は調査区壁面となるため長さ3.2m程度しか確認できなかった。

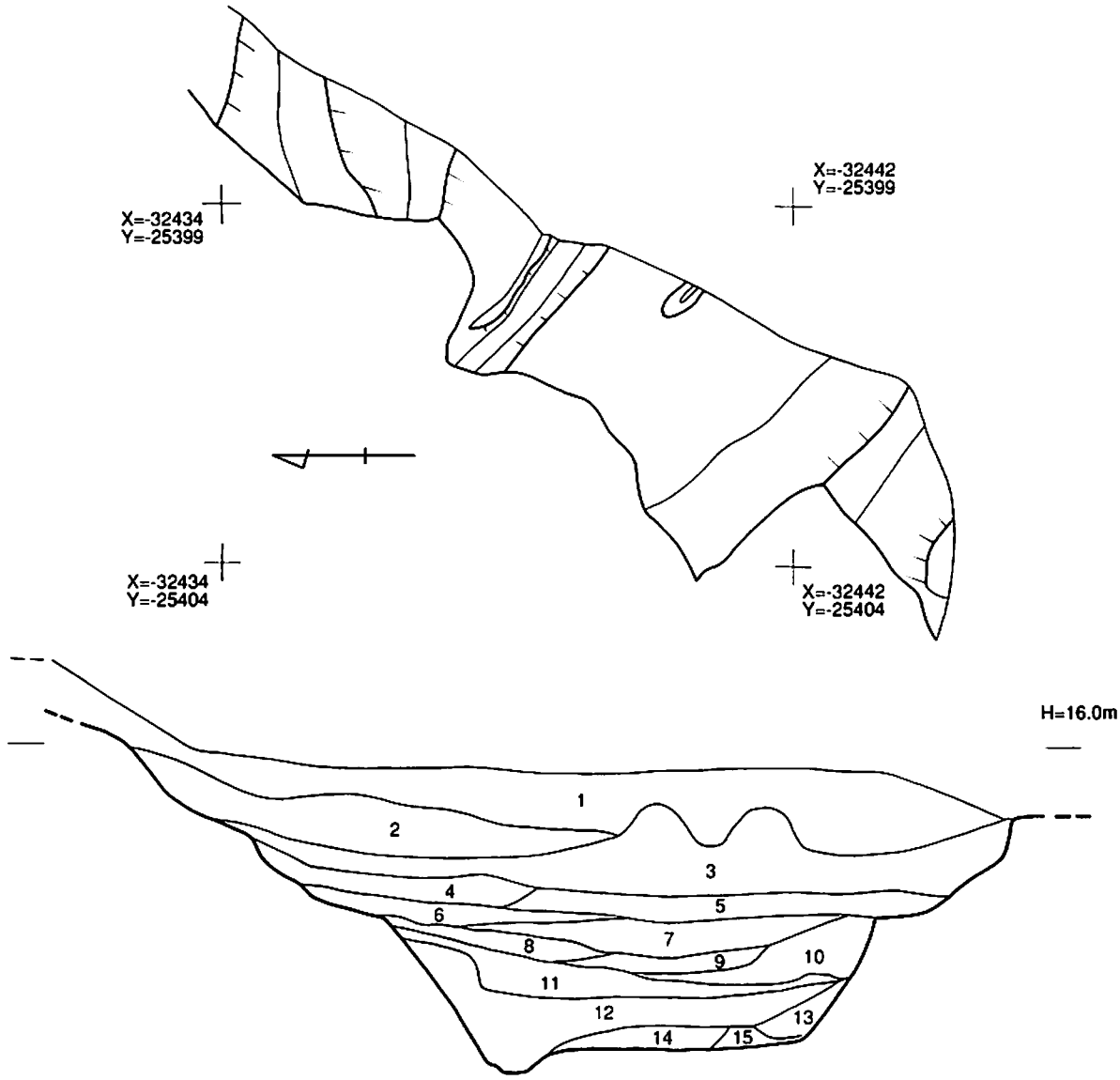
〔構造〕　断面形は上端部で幅11.8m、下端部で幅4.5m、深さ約3.8mの逆台形を呈し、中位で急傾斜となる2段掘り込みとなる。2段目の上端幅は6.8m。底部は南東方向に緩やかに上傾する。底部北壁際には、幅96cm、深さ30cmの側溝を有する。埋土は中位の傾斜変化点より下の6層からしまりの強い土壌となる。

当該遺構の性格については、側溝の存在と底幅が広いことから堀切状の登城道と思われる。

〔出土遺物等〕　埋土中から坏片やすり鉢、甕片など中世遺物が多量に出土した。また、底部北壁際の側溝の底から銅銭（詳細については後述する。）を検出した。

3）14号不明遺構

〔検出状況〕　14号不明遺構は、Ⅱ区中央付近の丘陵西縁に位置する。これまでの遺構と同様、横穴墓が想定されたが、屍床部の有無等により別種の遺構であることを確認した。西側は崖により切断された状況と



1　黒褐色土（表土）
2　暗褐色土
3　暗褐色土（2層に比べややしまる）
4　灰褐色土（固くしまる）
5　暗褐色土（固くしまる）
6　暗褐色土（固くしまる）
7　灰白色土（固くしまる）
8　灰褐色土（小礫含む）
9　暗褐色土（小礫含む）
10　暗褐色土（固くしまる。3～4.0cm大の礫含む）
11　灰白色土（固くしまる）
12　暗褐色土（固くしまる）
13　黄褐色土＋灰白色土（ややしまる）
14　灰褐色土（固くしまる。5.0cm大の礫含む）
15　灰褐色土（固くしまる）

0　5m

第25図　13号堀切

なる。

〔構造〕　形状は崖面による切断及び調査区外への延び等により判然としないが、比較的緩やかに斜傾する北壁と最大幅1.24mの帯状平坦面が残存する。

〔出土遺物等〕　埋土中から比較的多くの坏片を検出した。

2　出土遺物

Ⅱ区の遺構等から中世の遺物を多く検出した。ここでは、それら中世遺物のうち遺存状況の良好なものについて掲載する（第26、27、28図）。なお、掲載遺物の出土地点については、第26図8、第27図2、3、4、5、6は12号竪坑埋土、第26図1～5、9、第28図2は13号堀切埋土（第28図2は側溝底）のほか、第26図11は4号、第27図1、7は5号、第26図12、第28図1は8号、第26図7は11号と横穴墓への2次混入遺物も認められる。その他は、表採資料となる。

第26図1、2は染め付け皿である。1は碁気底の小皿である。内・外底面は無釉。内器面には口縁部と底部縁に2本の廻線、外器面には底部近くに1本の廻線と口縁部近くに梯子状の文様を描く。2は内傾する高台を持つ。器壁は薄い。全面に施釉し、内底面に草花文を描く。

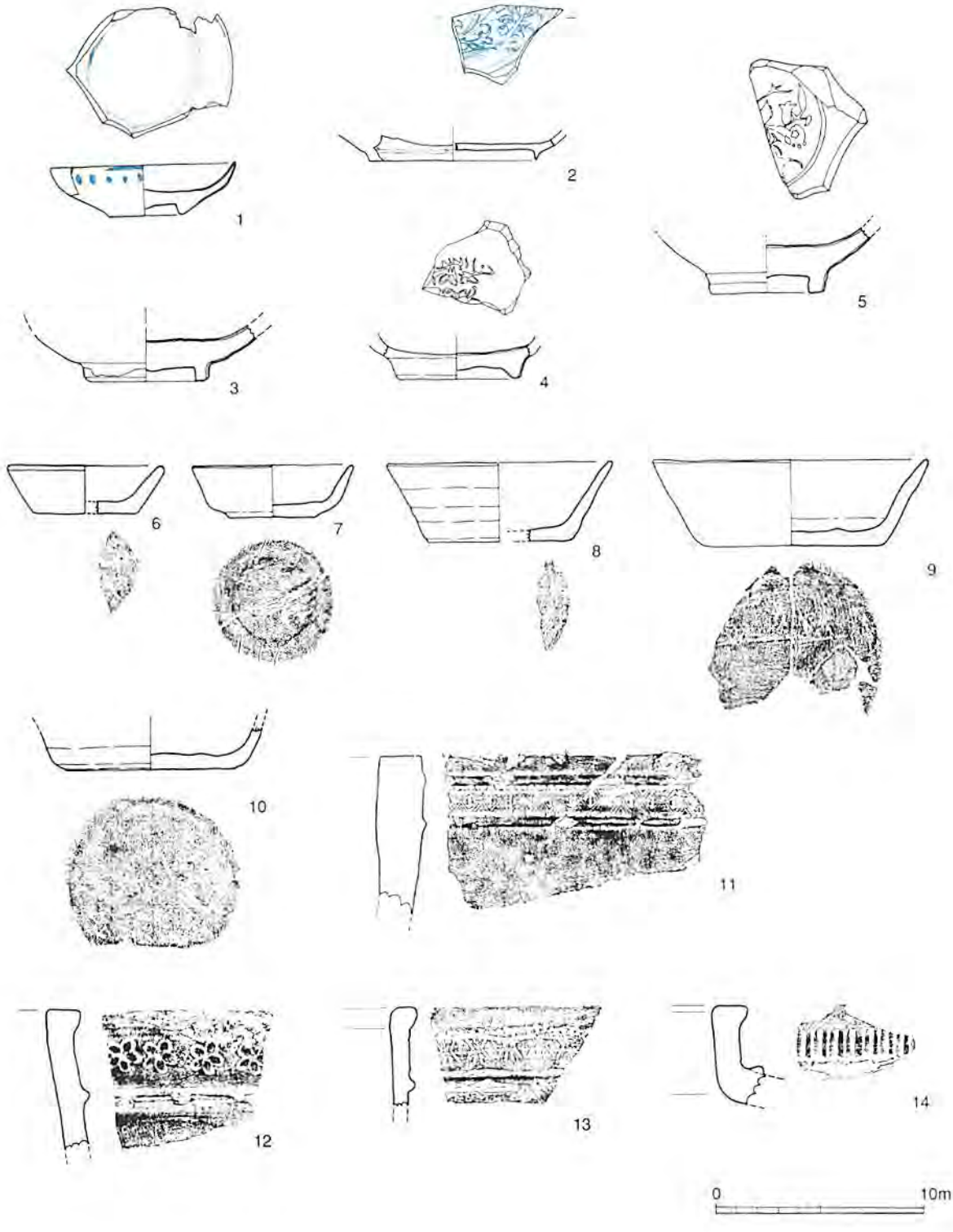
3～5は青磁碗の底部片である。3は端部を斜めに削った高台を持つ。灰青色の発色で、底部までの施釉で高台に釉垂れする。内底面には底縁近くに幅1mm程の沈線が巡る。4は高台が低く、やや外傾した断面逆台形を呈する。施釉は高台内まで及ぶ。内底面に草花文を施す。5は高台端を平らに整形する。深緑黄色で、高台端部まで施釉する。内底面には底縁に沈線を巡らし、その内に草花文を描く。

6～10は土師質土器である。6、7は小坏である。6の口縁部は直線的に立ち上がり、器壁は比較的厚い。底部は糸切り後ややナデ調整を施す。7は底部を段状に造り出しており、口縁部はやや外反気味に立ち上がる。底部は糸切り後丁寧なナデ調整を施しており、比較的丁寧な作りである。板目圧痕がやや残る。8～10は坏である。8はほぼ直線的に外傾する口縁部を持つ。外器面に回転ヘラ削り痕、底部は糸切り後未調整である。9の口縁部はやや外反気味に立ち上がる。器面全面に丁寧なナデ調整を施しており、底部も糸切り後ナデ調整を施す。外底部には幅1.8cm程の板目圧痕が残る。10は底部片である。底部は糸切り後丁寧なナデ調整を施し、内底面に指頭痕が看取される。

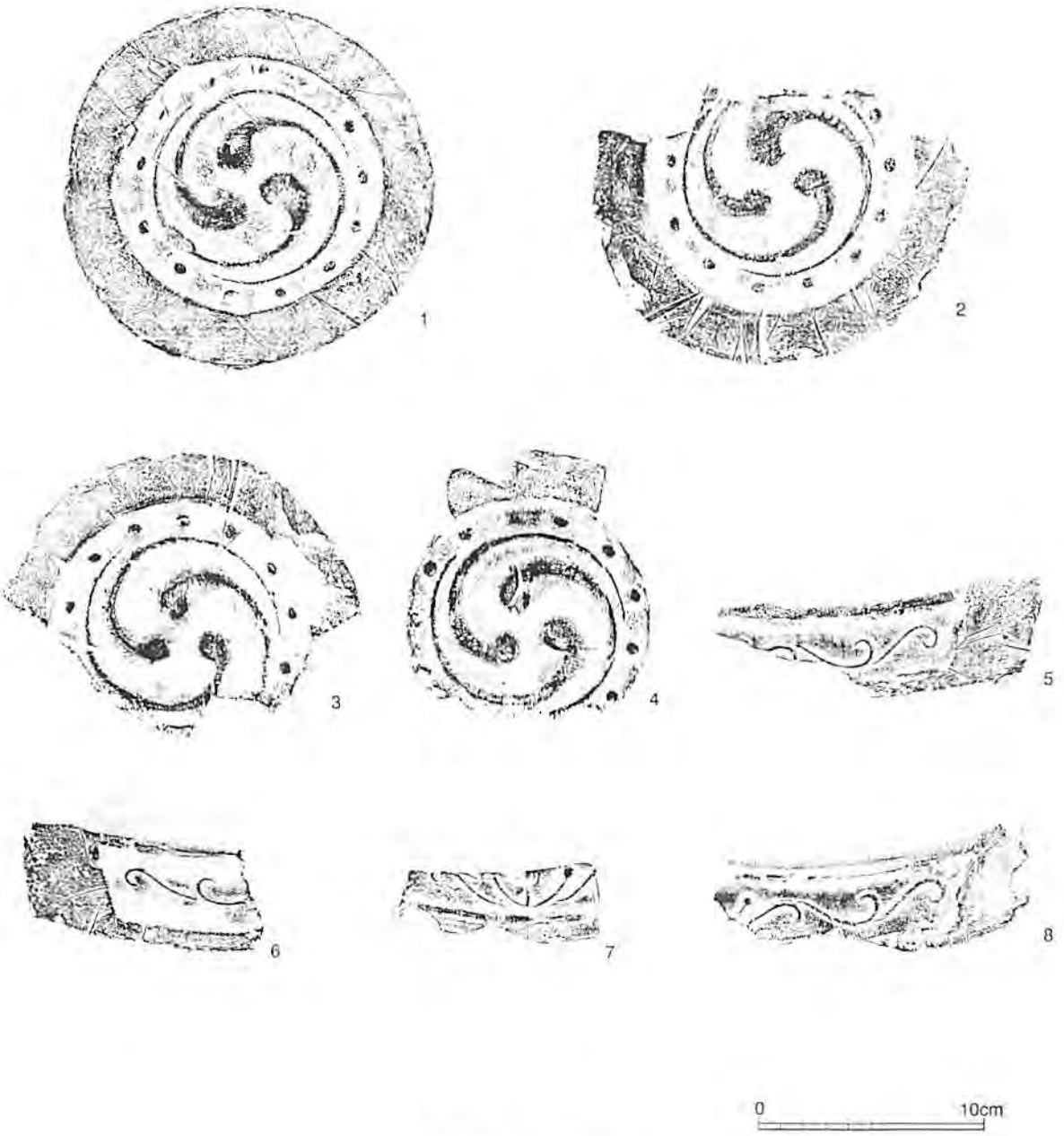
11～14は瓦質土器片である。11は大鉢である。底部に向かって直線的に下がる。器壁は厚い。突帯間に格子目文を施す。12、13は火舎である。口縁部と突帯の間にそれぞれ文様を施し、12は梅花文、13は菊花文である。14も火舎で前者と違い、胴部が壺状に開く形態である。蓮子窓状の文様を施す。

第27図1～4は軒丸瓦で、巴文を浮彫りにする。1は完形の瓦当部を有し、瓦当径15.2～15.5cm、瓦当厚2.2cm、周縁幅2.2～2.4cmを測る。外区には13個の珠文を配す。瓦当部に対して丸瓦はやや鋭角に取り付く。その接合部には、ヘラケズリ調整を施す。2～4も同様な造りである。5～8は軒平瓦である。瓦当部の完形個体はないが、おおよその文様を復元すると、中央に花弁を配し、外に向かって下巻き、上巻きの2葉を配する左右対称の均整唐草文様となる。

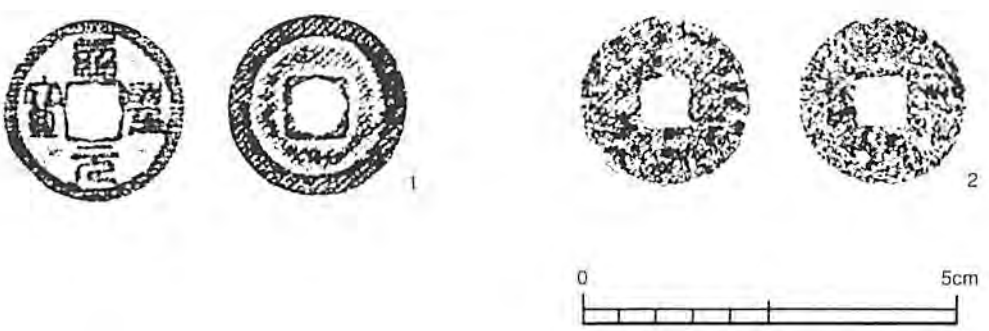
第28図1の銅銭は、「紹聖元寶」（初鋳造年1094年）である。径2.4cm、孔径0.7cmを測る。2は径2.2cm、孔幅0.6cmを測る。かなり歪みが生じる。



第26図　中世遺物



第27図　軒瓦拓影



第28図　銅銭拓影

第Ⅳ章　まとめ

第１節　城の鼻横穴群

1　形態分類及び変遷

当該調査において、城の鼻横穴群のうち11基の横穴墓（1号～11号）を検出した。後世の削平を受け全体構造を把握できる横穴墓は皆無であったが、残存する玄室構造の比較においてある程度の分類は可能となる。玄室の平面形、天井部の形態等から大きく4類（Ⅰ類～Ⅳ類）に分類でき、その特徴は以下のとおりとなる。なお、奥屍床のみ残存する2、10、11号横穴墓と玄室床面が欠損したと考えられる3号横穴墓については、この分類からは除外した。

Ⅰ類は、玄室がくびれ状あるいは奥壁に向かい幅を狭めることにより奥屍床を明確に造り出す平面形を呈し、寄棟形の天井部を有するタイプである。開口部は妻側となる。6号横穴墓が典型例として挙げられるが、天井部の不明瞭な8、9号横穴墓も当分類に含まれる。軒先の表現で、明瞭な張り出しをもつもの（6号）と屈曲のみのもの（8号）にさらに細分される可能性はある。玄室床面については、奥屍床を明確に造り出す意識から左右屍床との段差があり、通路を浅く幅広に造り出すことを特徴とする。

Ⅱ類は、玄室の平面形が方形を呈する。Ⅰ類同様、寄棟形の天井部を有するタイプであるが、Ⅰ類と違い平側に開口部を持つ。1号横穴墓がこれに分類される。Ⅰ類に比べ奥屍床と左右屍床との段差は小さく、結果的に通路はやや深いものとなる。また、奥屍床の両端を段状に造り出していることも特徴として挙げられる。

Ⅲ類は、玄室の平面形が台形を呈し、寄棟形の天井部を有するタイプである。開口部は妻側と思われる。5号横穴墓のみがこれに分類される。奥屍床と左右屍床との段差はほとんど無く、仕切により区分される。また、前2類に比べ、通路を深く幅狭に造り出す。奥屍床の両端を段状に造り出す点においては、Ⅱ類の1号横穴墓に類似する。

Ⅳ類はⅢ類と同様の平面形状を呈するが、軒先が屈曲のみで表現されたアーチ形の天井部を有するタイプである。奥屍床と左右屍床の段差は皆無で、仕切等も形骸化しているものと思われる。4号、7号横穴墓がこれに分類される。

以上、玄室の平面形と天井部の形態により当該調査における横穴墓を分類した。当該分類における変遷については出土遺物からの検討はできない状況にあるが、①奥屍床の隔絶性の消失、②天井形態の形骸化、③通路機能の低下の3要素からⅠ類→Ⅲ類→Ⅳ類への変遷が想定される。なお、Ⅱ類については奥屍床の隔絶性など初現的な様相は認められるものの、玄室の平面形及び開口方向にⅠ類との相違があり別系統の横穴墓と判断される。

順を追って見ていくと、まず、奥屍床の隔絶性、寄棟形天井を有したⅠ類が、次のⅢ類では、寄棟形天井は持続するものの、奥屍床の隔絶性は薄まり仕切で区画する形態に変化する。通路も幅狭となり、本来の機能は低下し区画溝のような様相を呈する。さらにⅣ類では、奥屍床の隔絶性は消失し、奥屍床と左右屍床との段差が無く、奥屍床前等の僅かな仕切と溝状の通路で3屍床を区画するといった構造に変化する。この段階で天井形もアーチ形と形骸化する。Ⅳ類では、基本形態の各部位の本来の機能が完全に失われ、単純な模倣形態となるものと思われる。

2　造墓期間

当該調査における各横穴墓の出土遺物については、後世の利用等により中世遺物と混在した形で検出されており、確実に副葬品といえる遺物は、9号横穴墓奥屍床部の出土遺物のみである。9号横穴墓奥屍部の出土遺物のうち須恵器蓋・短頸壺については有蓋壺と思われ、6世紀後半～末頃の所産と考えられる。このほか、時期比定のできる遺物としては、7号横穴墓埋土から採取した7c中葉に比定される須恵器坏蓋の小片がある。この坏蓋片が7号横穴墓の造墓年代を示す遺物かどうか検討する余地はあるものの、後世に混入した遺物とは認めがたい。

以上を先述した分類及び変遷に当てはめると、Ⅰ類が6世紀後半～末頃、Ⅳ類が7世紀中葉の玄室形態となる。このことから、城の鼻横穴群における造墓は、6世紀後半には開始され、7世紀中葉頃までは存続したことが想定される。Ⅱ類についてはⅠ類との先後関係に検討の余地があり、造墓開始については遡る可能性がある。浜戸川流域における他の横穴墓群の調査の増加を待ち、検討を加えたい。

3　横穴墓出土の巻貝について

当該調査では、5号、8号横穴墓から大型の巻貝片が出土した。風化の度合いが激しく、遺存状況も良くないので確定できないが、殻が球状で大きく、殻表には螺助があり、殻口は広いなどの特徴からヤツシロカイ科の巻貝と思われる。特に沖縄以南に生息するホロガイに近似する。加工した製品かどうかも現状では判然としない。副葬遺物の可能性はあるが、中世遺物に混ざった状態で出土した点と12号竪堀といった中世遺構の埋土からも出土している点から、後世の混入物の可能性も指摘できる。亀甲が多量に確認された雁回山北麓地域の横穴墓群からも報告例がなく、注意を要する遺物である。

第2節　隈庄城跡

1　登城道

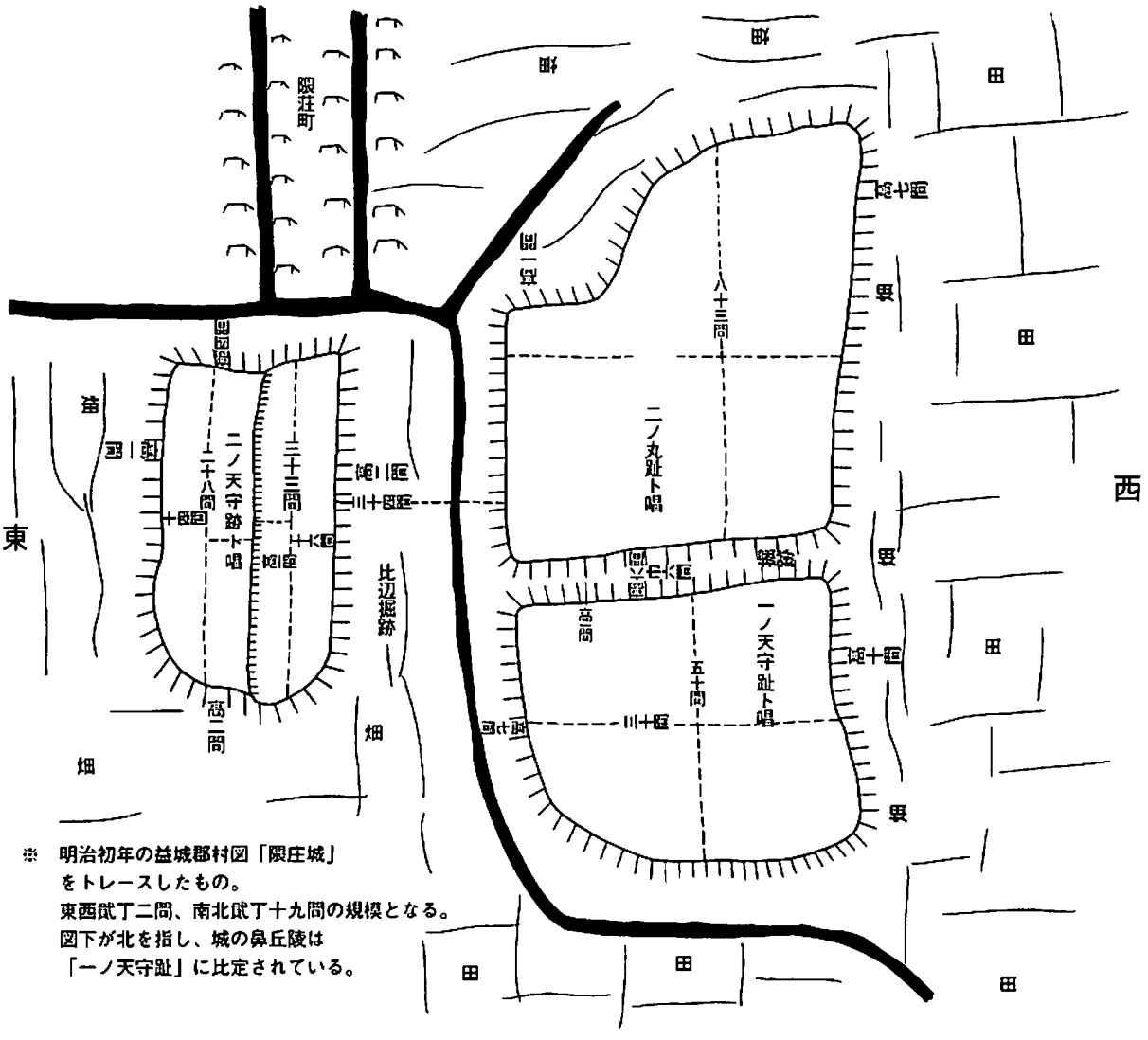
当該調査では、「隈庄城」関連の確実な遺構として、井戸跡（12号竪坑）と登城道（13号堀切）を検出し、城構造の一端を知ることができた。そのうちの登城道は丘陵西斜面下からの登城道と解され、登城ルートの検討を加える上で重要な発見といえる。

明治初年に編纂された郡村誌の益城郡村図「隈庄城」の絵図（第30図）によれば、城の鼻丘陵上を「天守跡」とし、現在の県道付近に「此辺堀跡」との表記が見られ、明治初年の段階では現在の県道と丘陵の間に南北道が敷設されていた状況が看取できる。その道は北側で西に折れ、当該丘陵を廻り込むようなルートをとる。今回検出した登城道については、丘陵裾に向かう北西方向への延びが確認されており、このルートに接続する可能性は十分考えられる。しかし「天守跡」と「二ノ丸跡」の間の中6間の「堀跡」から北上して接続する可能性も考えられ今後の調査が待たれるところである。

調査では道路長約3m分を検出したにとどまるが、現地形から推察すると、丘陵頂部へは中途で南へ屈曲し、南に回り込むルートが想定される。これもさらなる調査が必要であろう。

2　廃城時期

隈庄城の存続期間については、文献上では概ね南北朝期末頃に築城され、天文年間（1532～55）に戦国



第29図　郡村図記載の隈庄城

期の本格的な構えとなり、慶安4年（1651）の「慶安の差出」には既に「古城」との記載が見られることからそれ以前の廃城となる。このことは、南北朝期末にはこの地に中世城が存在し、天文年間に中世的な構造を取り込んだ本格的な築城が為されたものと言える。

当該調査では、南北朝期末の築城と天文年間の築城との関連を考察する遺構及び遺物の出土は無かったが、廃城時期については、土師質土器、青磁、染め付け皿など16c後半に位置づけられる遺物が関連遺構から出土し、それに連続する年代の遺物の出土が認められなかったことから、少なくとも16c末かそれに近い時期に廃城されたものと思われる。廃城にあたっては、12号竪坑の瓦等の遺物出土状況から意図的な投げ込みが想定され、廃城に際しては、何らかの作為があったものと推察される。

また、熊本県内では、鷹ノ原城跡（玉名郡南関町）、麦島城跡（八代市）、佐敷城跡（芦北郡芦北町）など、瓦の出土や近世城と同類の石垣を持つなど近世城との過渡的な様相を持つ中近世城が近年の調査で明らかとなっている。さらに、愛藤寺城跡（上益城郡御船町）、河内浦城跡（天草郡河浦町）でも瓦の出土が認められ、隈庄城跡もこれに類する城跡として評価できる。（熊本県立歴史公園鞠智城跡・温故創生館長大田幸博氏の御教示による。）

〈参考〉

隈庄城跡

当城ハ菊池家十代肥後守武房三男甲斐六郎武本ヨリ六代ノ孫甲斐重村在城ス大永ノ比ハ甲斐上総介敦昌阿蘇大宮司惟豊ノ幕下トシテ在城ス其子隈庄甲斐守親昌隈庄河尻上島村鮫村等ヲ領知して天正年中於隈庄卒去

(阿蘇氏説隈庄甲斐守親昌ト云者阿蘇家ニナシ惟豊神主ノ時隈庄城ニ甲斐伊豆守守昌ヲ城代トス訛テ之ヲ記シタルニハアラスヤ) 其子甲斐次郎鎮昌継家督在城スレモ幼弱ナル故ニ老臣甲斐伊豆守守昌(或説右馬允盛昌一説隈庄甲斐守) 即チ隈庄千余町ヲ領シテ当城ニ居レリ(当庄往昔稱隈牟田庄親昌ノ比ヨリ稱隈庄歟) 妻ハ甲斐宗運カ女也

＊「肥後国誌」後藤是山編　1917

〈参考文献〉

小林久雄・三島格　1965　「原始」『城南町史』　城南町 史編纂会

隈　昭志・大田幸博 編　1978　『熊本県の中世城跡』　熊本県文化財調査報告書 第30集

西住欣一郎　1991　「肥後における横穴墓について」『おおいた考古　第4集』　大分県考古学会

清田純一　1993　『舞原西遺跡』　城南町文化財調査報告 第8集

清田純一 編　1995　『史跡・塚原古墳郡ー保存整備事業報告書ー』　城南町教育委員会

美濃口雅朗　2001　「地域の概要ー肥後ー」『九州の横穴墓と地下式横穴墓Ⅰ』九州前方後円墳研究会

大田幸博　2001　『熊本県の主要城跡』　菊鹿町文科財調査報告 第8集

渡部忠重　1979　『続 原色日本貝類図鑑』　保育社

高木正文　1985　熊本県文化財調査報告第74集『古城横穴墓群』　熊本県教育委員会

図　　版

図版1

城の鼻丘陵全景（西から）

図版2

1号横穴墓

2号横穴墓

3号横穴墓

図版3

調査Ⅱ区全景（南から）

4号横穴墓

5号横穴墓

図版4

6号横穴墓

7号横穴墓

8号横穴墓

図版5

9号横穴墓（南から）

10号横穴墓

11号横穴墓

図版6

15・16号配置状況（東から）

15号箱式石棺（北から）

15号箱式石棺完堀状況（北から）

16号土壙（東から）

図版7

12号竪坑（南から）

12号竪坑内部

図版8

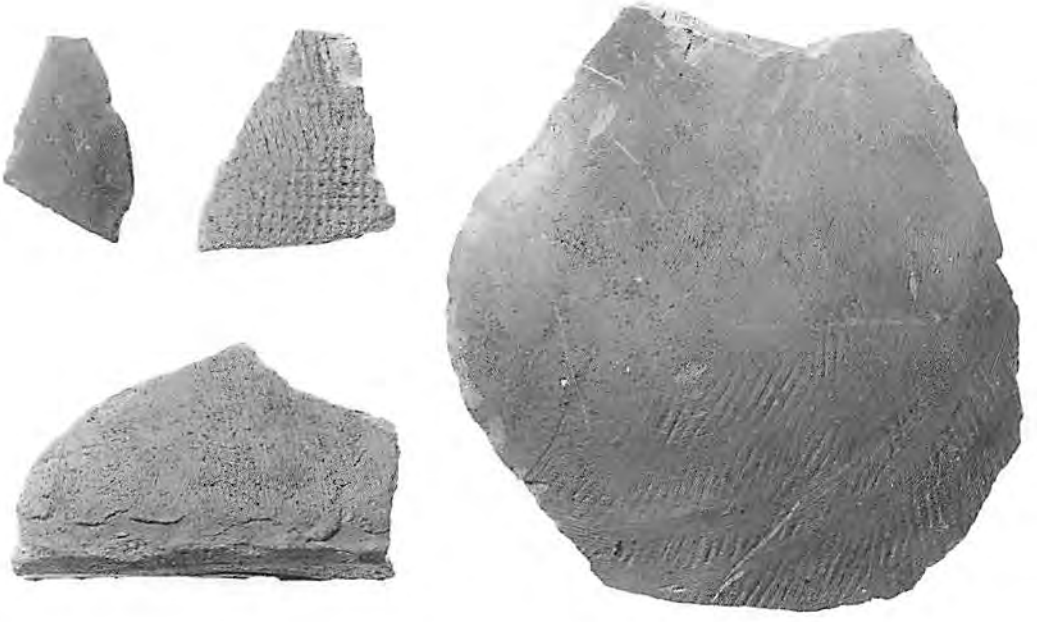
13号堀切断面（西から）

13号堀切近景（南から）

13号堀切全景（北東から）

図版9

須恵器



第19図2、4～6
（外器面）

第19図2、4～6
（内器面）

図版10

須恵器

第19図1

第19図2

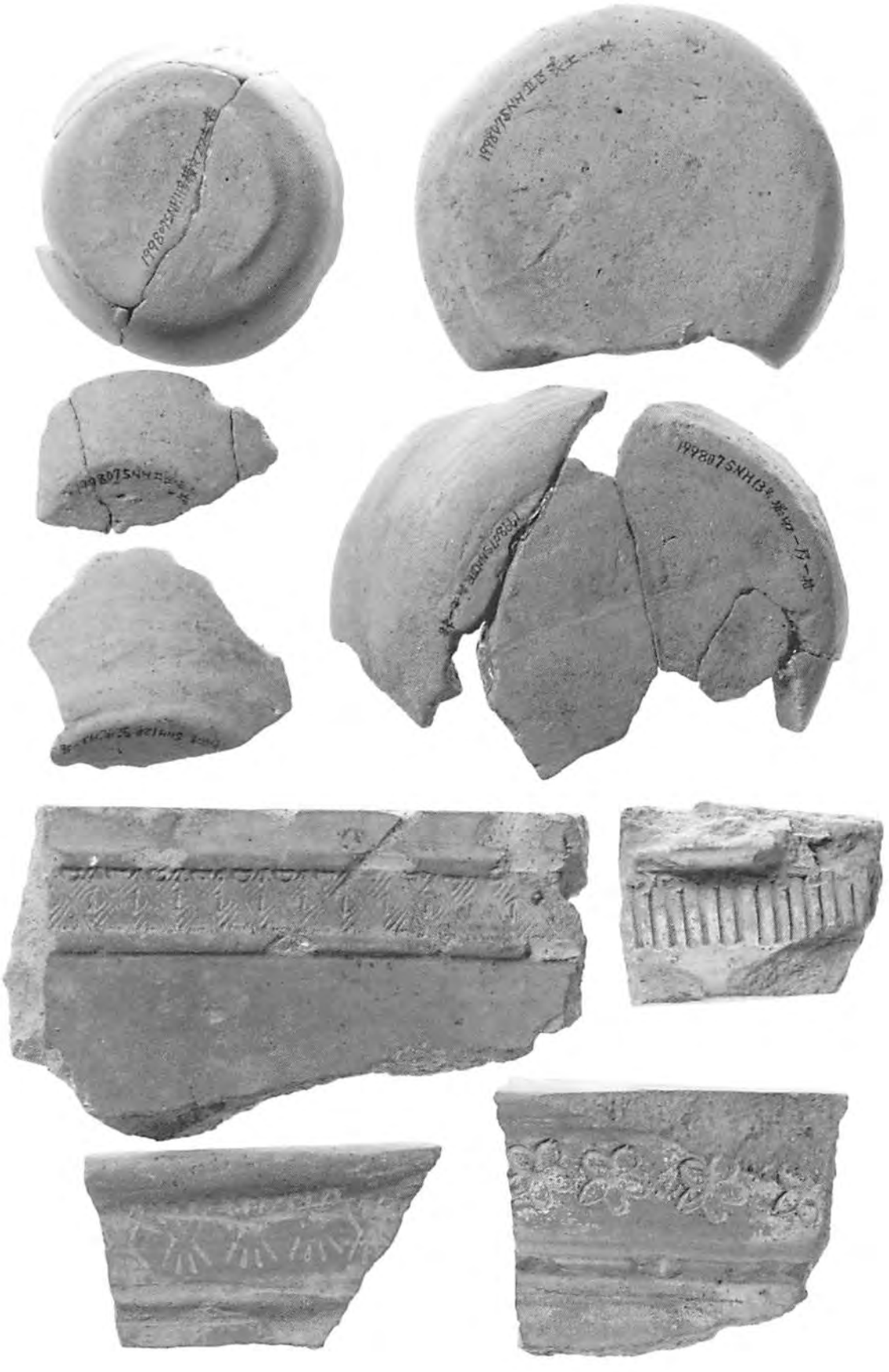
青磁・染付

第26図1～5（内器面）

第26図1～5（外器面）

図版11

土師器・瓦質土器



第26図6～14

図版12

軒丸瓦

第27図1、2

第27図3、4

軒平瓦

第27図5

第27図7

第27図6

第27図8

図版13

鉄製品

第17図1～10、14～17

図版14

銅銭・鉄剣・玉類

第20図1～4、第22図、第28図1、2

貝

5号横穴墓出土

8号横穴墓出土

報告書抄録

ふ り が な	しろのはなよこあなぐん
書　　名	城の鼻横穴群
副 書 名	古城地区急傾斜地崩壊対策工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	熊本県文化財調査報告書
シリーズ番号	第221集
編 著 者 名	矢野裕介
編 集 機 関	熊本県教育委員会
所　在　地	熊本市水前寺6丁目18－1
発 行 年 月 日	2004（平成16）年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しろのはなよこあなぐん 城の鼻横穴群 しろのはなこふんぐん 城の鼻古墳群 くまのしょうしろあと 隈庄城跡	くまもとけんしもましきぐんじょうなんまち 熊本県下益城郡城南町 おおあざくまのしょうあざふるしろ 大字隈庄字古城	43341	42 41 40	32度 42分 26秒	130度 44分 15秒	(自)・ 19980127 (至) 19990226	約600㎡	古城地区急傾斜地崩壊対策工事に伴う本調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
城の鼻横穴群	古墳	古墳時代	横穴墓　11基	須恵器、鉄鏃、玉類	
城の鼻古墳群	古墳	古墳時代	箱式石棺　1基 土壙　1基	刀子	
隈庄城跡	城跡	中・近世	井戸跡　1基 堀切　1基	須恵器、土師質土器 青磁、染め付け皿、 陶器、瓦	

城の鼻横穴群

－古城地区急傾斜地崩壊対策工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－

平成16年3月31日

編集発行

熊本県教育委員会

〒860-8609 熊本市水前寺6丁目18－1

TEL.(096)383－1111(代表)

印　刷

株式会社 大和印刷所

〒861-8031 熊本市戸島町920－11

TEL.(096)380－0303(代表)

15 教委 教文
② 005

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 221 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：城の鼻横穴群
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/